

Title	東京歯科大学広報 第214号 平成17年07月31日発行
Journal	東京歯科大学広報, (214): -
URL	http://hdl.handle.net/10130/3757
Right	



東京歯科大学広報



一年を振り返って

金子 譲

一年余前の学長就任式で、時代を読み取り、東京歯科大学の歴史に基盤を置いた考え方で大学の特徴を生かした運営を行いたい旨の挨拶をさせていただいた。教育行政・医療行政における近年の改革によって、大学は変革を遂げなければならない状況におかれている。この改革に順応できなければ次の時代を東京歯科大学は迎えられないと考えている。国公立すべての大学が現在土俵に在る。

教職員数1,145名(8月1日現在)の生活の命運を握っているのは法人であり、学校法人の社会的責務をはたすための実行部隊が大学である。法人と大学が一体になって大学運営に当たらなければ、現在の難局は乗り切れまい。

大学を取り巻く現状

今日の難局を構成しているのは、1. 少子化 2. 21世紀世界における日本の進路の明確化 3. 国の財政難である。平成19年にはわが国の大学定員と進学希望者数は数字上ほぼ同数となり、需要と供給が均衡する。歯科の地盤沈下は歯科大学進学希望者数の減少のみならず、その質までも低下させるであろう。こうした状況の中で、大学と歯科医療の明日を担う優秀な人材を集めるのには、若人にとってわれ

2005年6・7月

本号の主な内容

214号

- ・一年を振り返って(金子 譲学長)
- ・特色GP、現代GP探択

- ・平成17年度新規設置講座・研究室・診療科等紹介
- ・法人役員の改選
- ・入学試験要項・大学院歯学研究科募集要項

われの大学が強い魅力を持っていなければならない。21世紀、国際社会は「知的基盤社会」になると想定されていて、高等教育はこれを踏まえた政策に転換されてきている。科学技術を根底にした世界戦略が日本の進路である。科学技術推進策として、大学知的財産の企業ベース化への制度整備、大学院大学・専門職大学院の新制度、大学院の充実策、国立大学法人内におけるベンチャー会社設立・産学協同の推進策など文部科学省の施策は枚挙にいとまが無い。

教育機関への護送船団式一律国庫補助形態はすでに縮小され、研究も教育も競争環境の中で助成される形態が常態化している。文部科学省はこのようなシステムの制度化を、「競争環境」と呼んでいて、この整備はすでに終了したとしている。

医療行政では、医療費の削減方針のもとに、安全、信頼、快適な医療がなお求められ、これを査定する病院機能評価機構が昨今では多忙を極めている。医療事故と医療不信は社会問題となり、医療担当者の人間性と倫理が強く求められている。医科病院では急性期型、療養型などと病院機能の分化による形態をとるようになり一病院でそれらがすべて行われるような完結型医療は終焉を迎えてきている。一人の病人は病病連携、病診連携、家庭内医療のなかで医療をうける形態となる。したがって、病院は自分の機能を決め、特徴を鮮明にしなければ地域で医療連携がとれなくなり、先進先端の医療から遠のかざるを得なくなる。

つまり文部科学省のいう「競争環境」にあるのは教育・研究だけではない。厚生労働省管轄の病院機能においても同様であり、われわれの大学の役割すべてが競争の中にある。いってみれば、教育、研究、医療がそれぞれの競技種目のために競技場の整備がされ、勝負の判定基準が作られている。そこで、一流の競技者であろうとすれば、競技に出場しなければならぬし、決勝に残って入賞できる結果を得るよう常に準備がされている必要がある。

世界的な研究拠点としたセンター オブ エクセレンス (COE) 事業は文部科学省研究助成プログラムとしてはその最たるもので、いわば日本選手権である。教育においても特徴あるプログラムを助成する企画が多数ある。また、病院に対しても特定機能病院のように保険点数の差別化がすでに多くの面でなされている。

これらの競争への参加は任意である。競技には自分でエントリーするのであるから参加しなくてもすむが、それでは伝統を背負っている東京歯科大学の存在理由が問われよう。競技はハイレベルであり、こうした日本選手権はオールデンタルではない。COEでは医学、薬学、看護・福祉学などのくりの中での競争であり、また、7月末に採択結果を晴れて知らされた「特色ある大学教育支援プログラム」は自然科学、人文科学の枠を超えたあらゆる大学からの応募であり、約400課題からの採択率は11%という厳しさであった。COEは昨年、320件の応募数から44件がヒアリングまで進み、最終的に28課題が決定された。「唾液」をテーマにしたわが校の研究はヒアリングの機会を得たが残念なことにそこまでであった。こうしたいわば国家的助成は採択されると一般紙に多くのスペースが割かれて報道され、国民の知るところとなる。いわゆる名門校は着実にこのようなプロジェクトに採択され、名を出してくる。

東京歯科大学のスタンス

このような現状であるが、歯科医育機関としてのわれわれの大学は、教育・研究・診療の中で他を犠牲にしてどれか一つだけ特化して力をつけるというわけにはいかない。3種目が三位一体として、それぞれがリンクして高いレベルにある必要がある。それぞれに特化策がとられ、東京歯科大学として各種目に著しい高低差がなく総合点としても高得点となる戦略が必要である。

大学は講座によって成り立っている。講座は自治を持っている。しかし、大学が競争環境の中で大学の創意と特色を生かした横断的な政策を行うときに、講座自治が偏狭な状態であれば、講座が優先され大学の自治がとれなくなる。これがこれまでの講座制の一般的な反省である。とくにこの現象は従来の国立大学に顕著であり、独立法人化国立大学になった今日、学長のガバナンスが強調される所以である。

東京歯科大学では、このような弊害は従来から比較的少ない。しかし、教育・研究・臨床において専門性とその統合を今後さらに進めなければならなく、特に意識して行わなければならないのがさまざまな面における interdisciplinary と integration であろう。

少々長くなったが、以上が大学を取り巻いている現状認識である。これに対して東京歯科大学の実態を重ねあわすことから、目標達成のための具体策が導きだされる。

過去1年間の事業等

1. 組織改変

意思の決定から実行まで運営の円滑さと迅速性が事の成否を決めるので、組織制度の見直しから始めるのが筋であろう。そして必要があれば現状に適した再調整がされなければならない。

この観点から行ったことは5つである。

- 1) 学務協議会設置：従前の学務審議会は発展的に解消し、本協議会を設置した。メンバーは役席で決め口腔科学研究センター所長（木崎治俊教授）、教務部長（小田 豊教授）、学生部長（平井義人教授）を大学役職に加えて構成した。ここで、教育・研究・病院の学務に関して協議がなされ、教授会の決定事項については同会で審議・決定が行われる。
- 2) 口腔科学研究センター組織改変と国際歯科医学情報支援研究室の設置
大学の研究機能が統括できる組織として口腔科学研究センター組織（木崎治俊センター所長）を改変した。戦略的研究部門と研究支援部門の二つの柱として、前者には先端研究がセンター主導でできるよう研究者（東 俊文講師）を招き、再生部門を担当していただいている。講座研究、大学院研究がinterdisciplinaryにコア研究、プロジェクト研究に参加して成果と研究者育成に効果を挙げることが組織変革の目的である。研究成果はpublishによって意味をなすので、その支援も含めて後者としてnative speakerであるJeremy Williams助教授に本研究室に着任していただいた。
- 3) 水道橋病院の講座化：水道橋病院は25年前に本体が稲毛に移転したことから、同病院診療科の医員は大学の講座員のままで、勤務地が水道橋という形態になっていた。したがって水道橋病院各科は千葉の大学講座出張所の様相を呈する。人事権は千葉の講座主任にあり、病院長でさえ主導をとれる体制ではなかった。法人経理単位では初期から市川総合病院と同様に独立していたが、病院としてのオートノミーを現場で持つことができない体制となっていた。これがかつての水道橋病院であり、医員がモチベーションを維持することが困難となっても不思議ではない。このままでは水道橋病院教職員の一人ひとりの努力は結集した結果とはなり得ないので、水道橋病院が一つの組織集団としての目標達成はできない。患者中心病院としての機能向上と、財政健全化のためには、医員には自主独立の気概が何よりも必要である。すでに時も経ち、各科主任も成熟してきたことから、講座化に踏み切った。講座主任（柿澤 卓教授）のもと臨床研究に教育に今後の期待が大きい。
- 4) 口腔外科2講座の統合：口腔外科は医科と重なり合う部分が大きく、この部分が歯科医師の分限として大きな役割を果たしている。現行の分限は口腔外科疾患に限るものではなく、歯科と全身との関係、今後さらに増加する有病・高齢者の全身的な安全管理を行っていくうえでも重要である。東京歯科大学の口腔外科は、わが国の口腔外科医療において今日に至るまで歴史的に大きな貢献を果たしてきた実績を有している。二本の矢を一本に束ねるのが、今後の競争において有利であろうというのが統合の理由である。この成否は三教授（柴原孝彦教授、内山健志教授、高野伸夫教授）の和と指導力にかかっている。
- 5) 講座制のあり方に関する検討委員会：本委員会（委員長 薬師寺 仁副学長）はad hocとして設置し、昨年晩秋に答申書が提出された。現行の講座制には検討が必要であるとの内容である。時期をみて次のステップが必要であろう。

2. 病院機能の強化

われわれの大学の基本的役割は、医療にたずさわる人材育成と医学・地域医療への貢献である。したがって、病院は現在社会から要求されているニーズに適応した機能をもたなければならない。千葉病院は学生教育の重要な場であるが、病院機能としては患者中心に動いていなければならない。平成18年度からは卒業臨床研修医制度が義務化されるが、同様に患者中心に運営されなければならない。教育と研修が主体になった病院は、わが国の保険医療制度の中では患者に選択されなくなるであろう。まず、患者中心の確固とした運営形態の中で、教育・研修が行われていくことが望ましい。

病院は医療行政に遵守しなければならない規則が多く、この整備は千葉病院長が精力的に行ってきたところである。

- 1) 3病院長会議の設置：東京歯科大学の主要な特徴の一つは、歯科を主体とした2病院と570床の総合病院を有していることである。3病院間（石井拓男千葉病院長、畠 亮市川総合病院長、柿澤 卓水道橋病院長）での教育・研究・臨床における機能的な連携を目的として本会議は行われている。また、共同購入、臨床検査、その他集中的作業が財政上有効な事柄にも内容は拡大していくであろう。
- 2) 病院経営戦略全体会議：学校法人としての単年度収入は約200億円である。このうち病院収入はその7割である。したがって、病院の収支額が本学の屋台骨を構築しているといってもよく、大学の機能はすべからくコストパフォーマンスが勘案されながら遂行されなければならないが、特段に病院の重要性は財務割合から明らかである。3病院それぞれに病院経営戦略会議が設置されている。
- 3) 臨床専従助手制度の開始：臨床の本務教員は基礎講座の教員と同様、すべて大学から給与支給されている。臨床講座定員10名のうち1名を臨床専任教員として病院雇用とした。病院長の権限が講座に優先され、診療実績を向上させることを目的とした。
- 4) 口腔インプラント科の千葉病院設置：診療科であり、科員は病院雇用である。2階415.61㎡の診療室とし、新任助教授（矢島安朝助教授）を含めて4名の歯科医師、3名の歯科衛生士で合計7名とし、これまで各科で行われた診療をインプラント科管理とした。診療実績に従って、さらに研究・教育の機能が付加されたときに研究室、あるいは講座も考慮される。まずは、全力をあげて診療を軌道に乗せる計画になっている。
- 5) 口腔外科教授の招聘：口腔外科強化のため、都立病院口腔外科で実績のある部長（高野伸夫教授）の割愛・帰還によって3教授体制とし、主任教授（柴原孝彦教授）を教育・研究部門、診療科部長（高野伸夫教授）を臨床部門とし、講座内での統括者を別個にした。
- 6) 臨床教授の登用：臨床教員制度が動き出した。大学外の実績ある臨床家によって固定しがちな診療風土に新風を入れることが第一の目的である。千葉病院、水道橋病院の口腔インプラント科に計4名（添島義和臨床教授、武田孝之臨床教授、椎貝達夫臨床教授、飯島俊一臨床教授）の臨床教授が誕生した。
- 7) 心臓血管外科の設置：市川総合病院100床増床にともなって心臓血管外科を新設した。有能な新任教授（申 範圭教授）のもと、新設した各種施設とあいまって今後の活躍が期待される。また、皮膚科（高橋慎一教授）、臨床検査科（宮内 潤教授）、泌尿器科（丸茂 健教授）、リプロダクションセンター（石川博通教授）、整形外科（白石 建教授）、脳神経外科（菅 貞郎教授）と新教授が誕生し、市川総合病院の更なる充実を行った。

3. 国際交流

- 1) 準備をしていた中国西安にある第四軍医大学口腔医学院との姉妹校締結がこの9月2日に井上 裕理事長同道の上西安で行われる。
- 2) 韓国延世大学校歯科大学（朴 永哲学長）とは学生交流（平井義人学生部長）が1988年以降着実

に行われてきた。この実績の上に教員交流が積極的に開始されてきている。本年10月の東京歯科大学学会総会は水道橋血脇記念ホールで同学部との協同シンポジウムとして「再生」をテーマに実施する。(学会部理事 下野正基教授、国際渉外部長 井上 孝教授)

- 3) 市川総合病院近隣に99室の市川宿舎が本年3月に完成した。看護師用が主体であるが、ここに11室を留学生用として確保した。

明るい話題

文科省教育助成の2つのプロジェクトについて最近両方採択された(小田 豊教務部長)。「特色ある大学教育支援プログラム」と「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」である。ともに採択率は約1割である。3~4年にわたり総額約1億3千万円が助成される。特に「特色ある大学教育支援プログラム」については、募集から締め切りまでが、約3週間という短さであり、現状で勝負という形であった。本学の普段の教育法がこの面で評価された結果である。COEは、昨年6月ヒアリングまで残ったのであるから、1996年に私立大学学術研究高度化推進事業(ハイテク・リサーチ・センター整備事業)として、初年度にわれわれの大学が歯科大学で唯一つ選定された時の喜びを思い出して、口腔科学研究センターにはCOE獲得に一段の努力をお願いしたい。

法人(井上 裕理事長)が本学の格付けを、格付投資情報センター(R&I)に依頼していたが、その結果が6月に通知された。A+である。この符号は、AAAが最良評価で企業ではトヨタ、デンソー、大学ではAA+の早稲田、慶応、同志社が最良である。本学のA+という評価は、21段階に分かれている中の5番目であり、この経営格付け結果は、一応の安堵感はあるが、満足ではなからう。このような社会的な基準に照らし合わせた評価を外部にしてもらおう気運を法人が持っていることが、喜ばしい明るい明日を感じさせる。

学生は今、歯学体(オールデンタル)で活躍中である。今年は特に暑い感じがするが納得できる競技成績を期待したい。水泳部は今年も総合優勝とニュースが入った。17連覇とのことである。伝説を着々と作っている感じである。強いチームは勝つことを自分たちでそう不思議に感じない。勝つための術を知っているからである。歯科医師国家試験では、連続した好成績を収めているが、それは教務部の緻密な計画の成果であろう。勝つチームは手を抜けばすぐ転落することもよく知っている。

明日に向かって

大学の意思決定には、決められた手順がある。そこには、人がいて部署がある。記述した1年間に行ったことはすべてその手順に従った結果である。それぞれの事項は一定期間後に検証が必要である。今日学長のガバナンスが問題にされるが、統治システムのないところでの統治行為は不可能である。これはあらゆる部署の長においても同様である。このシステムのソフトには説明責任がなくてはならない。大学が総力を挙げなければならないこの時期、執行部は東京歯科大学の使命と目標を明確に説明できているか、昨年のように各講座等の責任者と面談の機会を持ちたいと考えている。

昨秋、新券発行を契機に、「野口英世と東京歯科大学」展(企画委員代表 奥田克爾教授)を水道橋病院で1週間にわたり開催した。2,000人以上の閲覧者となり、高添一郎名誉教授の記念講演によって、血脇守之助と野口英世が近代日本の形成にいかに関与したのか改めて感じさせられた。高山紀齋、血脇守之助の足跡と、その後の歴史が今日の東京歯科大学の使命を教えてくれる。有為な人材の育成と先進的な研究、医学・医療による社会貢献である。そして、これらは三拍子揃っていなければならないことである。

「精神は大胆に、段取りは繊細に」福沢諭吉の言葉である。「財務の健全なくして、学の発展なし」私の信条である。

この1年間の諸氏諸兄弟のご努力に感謝するとともに、次に向かっての協調をお願いしたい。

特色GP、現代GP採択!

文部科学省による国公立大学を通じた大学教育改革の支援事業である「特色ある大学教育支援プログラム」、「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に、平成17年度、本学が申請したプログラムが選定された。双方のプログラムとも、歯科大学としては初めての選定であり、本学の教育が社会的にも評価されたものである。

特色GPとは

文部科学省が平成15年度から発足させた「特色ある大学教育支援プログラム：特色GP (Good Practice)」とは、大学教育のさまざまな分野にわたる全国の国公立大学（短大を含む）で行われている取組から特色ある優れたものを選定し、将来の日本の高等教育の改善に活用するためのものである。本年度は、全体で410件の申請があり、47件が選定された（採択率11.4%）。本学が申請したテーマでは88件中12件が選定された。

本学は「主として教育課程の工夫改善に関するテーマ」で、平成10年度以来のカリキュラム改善と評価方法の取組を中心として申請し、書類審査ならびにヒアリング審査を経て採択された。採択校にはその取組をさらに充実・発展させる事業に対して、文部科学省から4年間にわたり年額1,550万円までの補助金が交付される予定である。

【本学の取組】

「IT環境でのグローバルエバリュエーション」

【取組の概要】

本学では伝統的な講座制の下に、科目担当者による単位認定が行われ、学生の総括的評価がなされてきた。全人的歯科医師の育成を目指した教育が謳われる今日、この科目の独立性が、学生の総合的な歯科医学の知識の把握と系統的インテグレーションの妨げとなる

だけでなく、教育評価の一元的な管理を不可能としてきた。そこで、平成10年からカリキュラムのすべての段階に、構造化されたIT環境を構築することによって、より質の高い歯学教育の実践を目指すと共に、独自に開発された問題作成システムにより試験問題をデータベースとして大学が管理することで教育評価の一元的な管理を可能とし、6年間を通して一貫した学生の総括的評価を行っている。このような構造化されたIT環境を基盤とした学習評価をグローバルエバリュエーションと名付けている。

この取組は、教職員が一体となって組織的に実施され、教育の質を保証する上で大きな成果をあげている。

【選定理由】

「この取組は、東京歯科大学における各科目の独立した閉鎖的な評価システムを改善すべく、IT環境を導入して取り組まれたものであり、グローバルエバリュエーションの例として高く評価されます。(1) ワークショップを開催しながら、全教員、全授業で組織的に実施している、(2) 試験問題のデータベースと学生に即した一括された学習評価とが有機的に連動し、その学習評価が6年間一貫して追跡できる、(3) 歯科医学の総合的な知識を獲得する重要性が確認でき、学習目標・学習方略・学習評価にかかわるカリキュラム改革につながっていくという点で、実質的な形成的評価が実現しうる意義ある試みといえます。

ただ、学生の論理的思考能力やコミュニケーション能力などがかかわって全人的教育（人本主義）に有効とする根拠をさらに明確にすることが必要です。また学習評価のシステム管理が成績の序列化という弊害を生み出し、学生の自主的な学習を阻害することがないか、日進月歩する医療行為に対応する教材研究が継続的に更新されているかが、次の点検項目

になるであろうと思われます。」
(特色ある大学教育支援プログラム実施委員会)

現代GPとは

文部科学省が平成16年度から発足させた「現代的教育ニーズ取組支援プログラム：現代GP (Good Practice)」とは、社会的要請の強い政策課題に対応したテーマについて、各大学が計画する教育改革プロジェクトの中から特に優れたものを選定し、高等教育の活性化を促進しようとするものである。本年度は、全体で509件の申請があり、84件が選定された(採択率16.5%)。本学が申請したテーマでは86件中14件が選定された。

本学は「ニーズに基づく人材育成を目指したe-Learning programの開発」のテーマで、「統合型歯科医学教育への新たな展開 - 系統講義コンテンツを進化させた統合的e-Learning Programの開発 - 」を申請し、書類審査ならびにヒアリング審査を経て採択された。今回の取組計画では、文部科学省から3年間にわたり年額2,400万円規模の補助金が交付される予定である。

【本学の取組】

「統合型歯科医学教育への新たな展開
- 系統講義コンテンツを進化させた
統合的e-Learning Programの開発 - 」

【取組の概要】

本学では、平成12年度に学生のための無線LANを敷設し、「いつでも」、「どこからでも」LANが利用できるIT環境を整えた。平成13年度からは、新入生全員にノートPCの所有を促進すると同時に、第1学年前期に「情報科学」を開講し、学生のPC・インターネット活用スキルの向上を図ってきた。今日まで、各講

座・研究室の教育用Web上の教育コンテンツが徐々に充実してきたものの、相互の関連性に欠けるなど近年歯科医学教育に求められている統合型学習には不十分である。そこで、本取組では、これまでに開発してきた多くの教育用Web上のe-Learning Programとしてのコンテンツを、統合型学習の支援の観点から再編、充実させると共に、さらに有機的に連携させるシステムを構築することにより、オンデマンドのself-learningプログラムを作成し、学生の能動的学習の習慣形成を推進し、ひいては問題発見・解決能力の育成を図ることを目的としている。

【選定理由】

「口腔医学としての歯科の取組であるが、科目ごとに開発されてきたコンテンツを、関連科目間での連携に重点を置いて構成しなおす取組であり、近年のこの分野のニーズに適合した独創的で有効な全学的な取組であると考えられる。また、IT環境の整備、情報教育、カリキュラムプランニングとHP作成のための研修による教員能力向上を背景にし、蓄積されたコンテンツをベースに、共通書式による再編、系統的科目相互をリンクして相互検索を可能にする仕組みを重点に、統合的学習支援システムを開発するという、現実的で有効な取組で実現可能性が高いと考えられます。

今後、メタデータ化と公開に関する点についてさらなる検討が望まれます。」

(現代的教育ニーズ取組選定委員会)

平成17年度新規設置講座・研究室・診療科等紹介

口腔健康臨床科学講座

「口腔健康臨床科学講座」は、平成17年4月に水道橋病院に開設された病院全体を包括する形態の統合講座です。

水道橋病院は、昭和56年に大学が千葉に移転した後、旧校舎で診療を続けておりましたが、平成2年TDCビルの建設に伴い、本学首都圏の拠点病院として現在に至っております。その間、水道橋病院は臨床病院として機能し、講座は置かれておらず、千葉の各臨床講座から数名ずつの医局員の派遣によって、各診療科が運営されておりました。したがって、水道橋病院の各科構成員は、親講座の意向によって決められ、しばしば病院運営に支障をきたすこともありました。しかし、水道橋病院全体が一つの講座となったことで、従来の独立採算制にも矛盾することなく、院内の人事裁量が可能になり、病院運営に自由度が与えられた訳です。また、このように講座として独立したことで、科を越えて命令指示系統の一本化が図られ、各自が病院と講座の立場を意識することにより、独自の病院運営ができるようになりました。しかしながら、その反面、今まで臨床一辺倒であった病院は、講座としての責務も十分意識しながら、本校との人事交流も視野に入れ、運営して行かなければなりません。

口腔健康臨床科学講座は、従来の専門科目別講座とは異なり、研究面よりむしろ臨床を視野においた統合講座で、講座の中に専門分野がある特異な形態の講座です。例えば、講座としての口腔外科学は「口腔外科学分野」となり、病院としての診療科は、「口腔外科」として呼称される訳です。

さて、講座であれば学位取得と大学院も重要な課題です。今までほとんど臨床一本に甘んじていた状態から、研究面・教育面にも力を入れなければなりません。しかし、水道橋病院は施設の特異性をみても、基礎的研究は難しいことから、臨床研究が主体とならざるをえません。幸い水道橋病院は患者数が極めて多く、臨床データの蓄積には事欠きません。今年度には新しいコンピュータシステムも整備され、容易にデータベースを作ることができ、これを基にEBMに貢献できる臨床研究が期待できます。しかしながら、学位取得はまだ先のことであり、今は研究指導者の育成、あるいは臨床統計学的研究とは何か、臨床論文で立派に学位に値する研究の地歩を固める時として、講座としての第一歩を踏み出したところです。



口腔健康臨床科学講座会風景

さて、病院が講座として認められたとしても、水道橋病院の使命はあくまでも診療実績をあげ、首都圏に確固たる東京歯科大学の拠点を築くことです。病診連携を踏まえ同窓をはじめ、近隣の一般臨床医

は何を大学に期待しているのか、患者の要請は何かを考えなければなりません。従来の講座制による縦割りの専門診療形態では、これらの要請には最早応えられません。そこで、水道橋病院は口腔健康臨床科学講座開設を機に、さまざまな要請に応えられるよう基幹型歯科病院への機能機構改革を進めようとしております。

なお、現在発足時の陣容は、教授4名、助教授3名、講師11名、助手16名の大講座です。 (柿澤卓)

国際歯科医学情報支援研究室

今年4月、東京歯科大学は千葉キャンパスに「国際歯科医学情報支援研究室」を設置するという、日本国内の歯科大学では初めての試みとなる革新的な一歩を踏み出しました。私はこの研究室に、4月に着任しましたジェレミー・ウィリアムスと申します。ここでは、この研究室の目的や活動について大まかにご紹介させていただきます。

この研究室の最も重要な目的は、大学院生や学内の先生方がその貴重な研究成果である論文を国際的なジャーナルに投稿しアクセプトされるために、論文校閲をするという事です。これが、現在の私の研究室の最も核となる重要な仕事で、それが何よりも優先されます。その最終目的は、研究者に対して投稿の準備から出版にまで関る、完璧な語学面でのバックアップをすることにあります。

例えば、出版に至るまでのエディターや他の研究者との手紙、電話またはe-mailなどでのやり取りなど、研究以外に必要な事務処理に関しても、支援するこ

とができます。また、投稿論文に関する審査員のコメントなどを読解するという支援もいたします。これは、特に審査員が英語のネイティブスピーカーではないときには、非常に難解なことがあるため重要な支援項目と考えます。

そして、このような支援によって、研究者には重要で価値のある研究に、より多くの時間とエネルギーを使ってもらいたいと願っています。加えて、国際学会等における、スピーチや発表の支援も重要です。これには、スピーチ原稿に使われる言葉遣いのチェック、またスピーチの基本として発音や発声の仕方についても支援します。また、どのような質問がされるかを想定し、事前に準備できるように支援していきたいと考えます。

更に、国際歯科医学情報支援研究室として、英語での科学研究論文の書き方のワークショップを今年度から新しく始めるということ、ここでお知らせできる事を、特に嬉しく思っています。今年度は、始まったばかりの研究室のため後期に行うワークショップですが、来年度からは前期に行う予定です。

本来は大学院生に向けてのワークショップですが、興味のある誰もが参加できるようにするつもりです。また、このワークショップシリーズの最後には、英語論文の書き方や、発表されるために様々な面から助言を与えてくれるだろうと思われる、この分野でのエキスパートをお招きしてレクチャーをお願いすることにしています。

このワークショップシリーズのために、現在小冊子を執筆中ですが、1~2年以内にはこれを本にまとめて出版したいと考えています。そして、このワークショップの一環として参加者に役立ててもらいたいと思っています。

このようなワークショップは他に例をみないユニークな機会ですので、学生たちには是非参加してもらいたいと強く勧めます。

また、この研究室では海外との渉外に関する様々な活動や、歯科医学に関する新しい英語のテキストの開発・出版なども行います。

将来的には、この研究室が東京歯科大学にとって掛け替えのない貢献が出来ればと考えます。大学の研究能力と教育の可能性を、学生や教員スタッフの皆さんと更に発展させるように共に歩めることを楽しみにしています。

また、この取り組みが国際的にも認められ、それによって日本における大学の評価が上がり、日本のみならず海外からも注目されるようになる素晴らしい機会だと思っておりますので、実現に向けて努力したいと考えています。

(Jeremy Williams)



Jeremy Williams 助教授

分子再生研究室

平成17年より口腔科学研究センター内に新たな部門として発足いたしました。組織に存在する幹細胞に注目し、歯科医療あるいは医療全般への応用を目指しております。再生医療は自然治癒力を最大限に発揮させる医療です。移植医療とともにこれからの大きな発展が望める分野でもあります。本学が世界

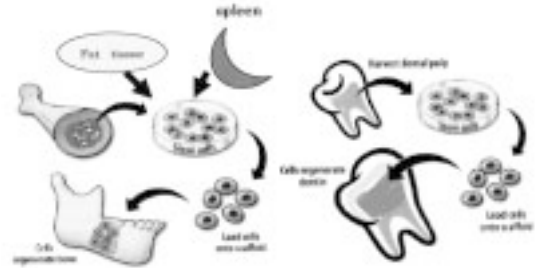
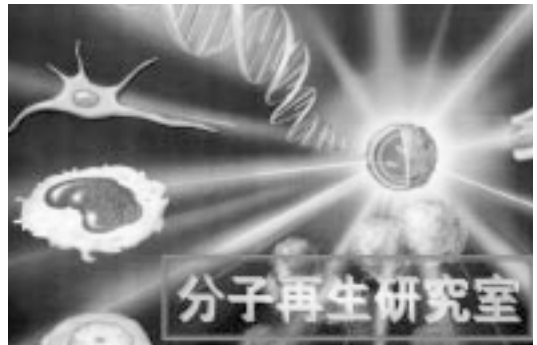
をリードする基地となれるよう意気込んで取り組んでいます。

研究の基本方針

臨床に密接した研究を目指します。特に治療法の開発を中心的な研究目標とします。

研究の方向性

- 1、組織の幹細胞は治療力の源でもあります。傷を埋め組織が再生してくるプロセスを利用して多彩な組織を再生させることが大きなテーマです。歯科領域では歯周病の治療、歯周組織の再生はもう実際に利用されている場面もあります。さらに歯牙の再生、なども実現の可能性が十分あることが認知されています。
- 2、胎児幹細胞（ES細胞）は、多くの社会的問題を含んでいます。そこで我々は成人にも存在する幹細胞（組織幹細胞）を利用しようと考えています。これは自分自身の細胞を利用するので、拒絶反応や、提供者の有無を考えずにすむという大きな利点が考えられます。
- 3、組織幹細胞のソースとしては、骨髄のほか到我々は脂肪組織、皮下組織、などから幹細胞を取ってこようと考えています。より簡単にかつ患者の苦痛を最低限にすることが可能になる方法を考えています。
- 4、組織の幹細胞は増殖する能力と未分化性を併せ持つところから癌化とも深く関係があると考えられています。私たちは癌治療に幹細胞の研究を応用しようと考えています。口腔内悪性腫瘍は扁平上皮癌など治療効果が十分得られていない癌もあります。血液癌の治療法同様、幹細胞の研究から癌治療への進展が期待されています。



研究の現状

組織の再生機構の中心と考えられる組織幹細胞に焦点を当て、組織の炎症と再生機構のかかわりを解明してきました。消化器内科出身の東を中心として現在、主に、肝臓に密接した関係を持つ脾臓の組織幹細胞をDNA結合色素Hoechst33342により染色してFACSでソートしたサイドポピュレーション細胞（side population cell : SP細胞）を対象にした研究を遂行しています。肝臓が炎症を起こすと肝臓からの炎症性サイトカインが脾臓に作用し脾臓の幹細胞が増加することを明らかにしています。これらの成果は近々に論文として発表される予定です。

研究からベッドサイドへ

我々は積極的に臨床応用を目指す観点から、できるだけ実際の臨床現場の状況を考慮しながら研究を行っています。ベッドサイドへのフィードバックを積極的に行おうとするものです。未来の歯科医療を支える歯科再生医学の発展と普及に大きく貢献することと、この分野で展開されている再生医療産業への発展を目標とします。すなわち「本学固有の医療技術を世界に向けて発信させる」という大きな貢献をもたらすことになるものと確信しております。

構成員 講師 東 俊文
研究補助員 落合 宏美

(東 俊文)

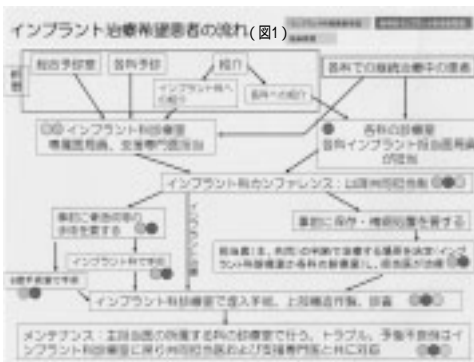
千葉病院 口腔インプラント科

千葉病院では、ますます複雑化、多様化する患者のニーズに応えるため、今まで各科でバラバラに行われていたインプラント治療をひとつの診療科に集約し、包括的治療が可能な最新の設備を整え、本年5月9日より

り口腔インプラント科が新設されました。インプラント科が開設されるまでの間、多くの先生方のご指導を賜り、また事務系の皆様、施設課の方々のご協力をいただきました。ひとつの科が開設されるためには、多くの人間の多大なエネルギーが費やされることを実感させられました。この場をお借りし、皆様方に改めて感謝の意をお伝えしたいと存じます。

さてインプラント科設計のコンセプトは、「患者が安心、快適、便利を実感できる診療科」であります。一般的な大学病院のイメージは、「汚い」、「古い」、「待たされる」、「横柄」など患者にとっては好ましくないイメージであったことを反省し、これを設計上の原点と致しました。特に多くの開業医の先生方から大切な患者をご紹介いただくためには、患者サービスを充実すべきであろうと考えました。具体的には、1.病院内の特区(患者を待たせない、移動させない)、2.設備の充実(プライバシーを尊重する個室診療室、相談室、安定感のあるチェア等) 3.IT活用による利便性(科内ネットワーク) 4.大学病院の特徴を生かしたシステム(手術時の静脈鎮静法併用、入院下での治療、臨床検査によるリスクファクターの明確化、CT、MRIの活用)等を念頭においた設計と運営システムを採用いたしました。おかげさまで、多くの患者から今までの大学病院とは違うとお褒めの言葉をいただいております。

次に、インプラント科診療室で治療を行うことのできる医局員は、登録制を取っており、インプラント科専属医局員4名、各科のインプラント診療担当医局員(従来各科でインプラントの診療を行っていたチームのメンバー等:約120名)さらに4名の臨床教授(添島義和先生、飯島俊一先生、椎貝達夫先生、武田孝之先生)となっています。従いまして千葉病院内に来院したインプラント治療の希望患者は図1のように流れることになりました。千葉病院内でインプラント治療を行う患者はすべてインプラント科カンファランスにかけられ、討議の後にインプラント科内で埋入手術や上部構造の装着が行われるシステムがとられています。これらのシステムは、今年の10月より開かれているインプラント科運営委員会で決定されました。



受付から診療室

インプラント科で診療を行う医局員は、「インプラント科医療安全、医療の質に関する規定」に則って診療が行われます。この規定の中に埋入手術執刀医資格が明記され、それぞれの医局員のレベルをステップ1から3までにわけ、執刀医としてインプラント治療を行うためには、それぞれのステップを終了するごとに総括的評価が加えられることになっています。このようなシステムをとることが医療安全、医療の質を担保することになり、患者中心の医療へとつながるものと考えています。

インプラント科の目標は、「高度なインプラント治療と



手術室



インプラント科専属スタッフ

エビデンスを継続して発信できる診療、研究、教育の拠点を「目指す」ことであります。EBD (Evidence-Based Dentistry) を確立し、これが開業医の先生方への有益な情報となることが大学病院の使命であると考えます。スタートしたばかりの千葉病院口腔インプラント科ではありますが、講座の枠を超えて、互いに協力し合って、「東京歯科大学発、世界に向けたインプラント情報の発信」ができるように、全力を尽くして行く所存であります。皆様方におかれましては、新しく開設された千葉病院口腔インプラント科に対して、何卒ご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

(矢島安朝)

市川総合病院 心臓血管外科

本年4月、東京歯科大学市川総合病院に心臓血管外科が新設されました。市川市の中核病院である市川総合病院ですが、循環器医療では、循環器科が診断と内科治療を行い、外科治療を要するときには慶應義塾大学病院など他施設に依頼してきました。昨今の病院の役割分担を明確にしようとする流れの中、急性期医療を担う市川総合病院では、内科部門である循環器科に加え外科部門、すなわち心臓血管外科が必要であるとの判断から、高橋正憲前院長の時代に心臓血管外科開設が立案され、大木貴博循環器科部長が奔走し、新棟開設に合わせ畠 亮院長で実現されました。今回の開設は、当院に留まることなく、市川市で初めての心臓血管外科の誕生であり、市川市の循環器医療を大きく変える画期的な出来事でもあります。

開設に当って、ハード面では、事務サイドとの綿密な打ち合わせの結果、心臓用手術室の空調・照明の改修とデジタル録画装置の設置、新棟(北病棟)3階にICU4床とCCU4床、人工心肺装置・PCPS流量補助循環装置・IABP圧補助循環装置・移動式血管撮影装置・手術鋼製器具一式など非常に充実した装置が設置されました。ソフト面では、私を含め3名の心臓外科医が採用されました。何れも自ら希望し集った者ばかりで、気力・経験ともに充実しております。新規採用の体外循環担当MEも本院ME部門と慶應大ME部門の協力を得て堅調にその職に当たっています。麻酔科にも、心臓麻酔専門医を非常勤医に招聘していただくなどのご協力を得ています。看護部門では、開設前より他施設に赴くなどの研修の成果があり大きな混乱もなく経過しました。診療体制では、循環器科との信頼関係が構築されているのが本院循環器医療の強みです。救急医療を例にとると、年間を通じ循環器科または心臓外科医が院内に常駐し内科外科に拘わらず積極的に救急患者を受け入れる体制としました。このように、ハード面、ソフト面ともに極めて順調なスタートを切ることができましたのも皆様のご理解があつたことと心より感謝しております。

心臓血管外科の対象疾患は、虚血性心疾患、後天性弁膜症、大動脈疾患、先天性心疾患の4つに大別されます。本邦年間手術症例約52,000例のうち、虚血性心疾患と後天性弁膜症が66%を占め、大動脈疾患、先天性心疾患と続きます。当院では、小児先天性心疾患を除くほぼ全ての疾患に対する治療が可能です。現スタッフの経験を持ってすれば、良好な成績を出せると考えています。また、常に時代に即した診療を行っていくことを心掛けたいと思います。

新規開設メンバーの誇りと希望を胸に、症例数を重ね、着実に成果を残し、心臓血管外科専門医研修施設(承認予定)として市川総合病院の発展に貢献したいと思っております。

(申 範圭)



心臓血管外科開設スタッフ。左より樋口ME、森助手、申教授、笠原助手



心臓手術室にて

千葉病院 専門外来

口臭外来

口臭は自分自身でその程度を評価できるものではありません。それ故、悩み苦しむものです。口臭外来の目的は、このような口臭を具体的にグラフや数値化して患者に提示することです。したがって、口臭が有るか無いかを明確に示すことが第一歩となります。口臭の原因疾患は口腔領域の疾患に起因することが圧倒的に多く、とくに歯周病はその筆頭に挙げられます。オーラルクロマやガスクロマトグラフによる検査の結果、口臭が認められたならば歯科口腔領域の疾患を治療し、口臭の改善を図ることが口臭外来担当医の第二の業務となります。

千葉病院における口臭外来は、平成13年5月に保存科第一診療室内に開設され院内標榜、以来700名以上の新患を担当してきました。平成16年に専門外来の見直しと新たな申請が行われることとなり、受付開始日の11月1日に申請、12月8日の千葉病院倫理委員会にて承認、12月13日の病院運営会議で報告され、実施は同日付けで引き続き許可されています。

顎変形症外来

上下顎骨の変形程度の大い顎変形症患者に対し、上下顎関係、咬合状態、咬合機能ならびに顔面の美的調和を改善するためには外科的矯正治療が必要であり、口腔外科と矯正歯科とで協同治療を行っています。初診患者は、まず矯正歯科に登録し、治療概要の説明を受け、検査及び両科協同カンファレンスによる診断を経てから術前矯正治療をはじめます。顎矯正手術前に患者を交えて手術の予定について再度相談し、同意を得てから口腔外科医によって手術を行います。入院は7～10日であり、その後術後矯正治療が行われます。トータルの治療期間は、2～2年半であり、後戻りを予防するための保定に入り、メンテナンスに移行して咬合の長期安定をはかります。なお、この治療に関して顎矯正手術はもとより手術前後の矯正治療も保険が適用されます。

リラックス治療外来

安全性に加えて快適性がある初めて、患者様の満足できる歯科医療が提供できるのではないのでしょうか。患者様の不安や痛みを我慢させたままでは、患者様の十分な満足は得られないかもしれません。

精神鎮静法(おもに静脈内鎮静法)によって患者様の不安を除去または軽減し、快適な環境下で歯科治療を受けていただく場を提供するのが、「リラックス治療外来」です。「リラックス治療外来」で担当する患者様は、高血圧症などの有病者や脳貧血症・過換気症候群・異常絞扼反射(嘔吐反射)などの歯科恐怖症の方々です。静脈内鎮静法下での治療が難しいような患者様(小児を含む)の場合には、全身麻酔下の歯科治療も積極的にを行っています。年間約1500例の静脈内鎮静法と約150例の全身麻酔が行われ、全身麻酔のうちの80%程度は日帰りで行っていますので、入院の必要がありません。「お昼寝の間に歯科治療」を合い言葉に、安全で快適な歯科治療を提供いたします。

慢性の痛み・しびれ外来(ペインクリニック)

慢性の痛み・しびれ外来(ペインクリニック)は、三叉神経痛や顔面神経麻痺はもちろん、顎関節症の筋痛(筋・筋膜痛症候群)、帯状疱疹など様々な口腔顎顔面部の痛みや運動・知覚麻痺を治療の対象としています。また、抜髄や抜歯後に臨床的には特別な異常所見を認めないにもかかわらず、持続する灼熱痛や拍動痛を訴える慢性の神経因性疼痛や、最近増加している下顎智歯の抜歯後やインプラント手術後の下歯槽神経・舌神経麻痺の症例も治療の対象です。治療法として星状神経節ブロックを含む神経ブロックやトリガーポイント注射、投薬治療などがあります。ペインクリニックで重要なことは、「発症したらともかく速やかに専門の治療を行う」ことです。慢性化した状態では治療が極めて困難になります。是非、速やかにご紹介ください。

障害者歯科外来

障害者歯科外来の対象となるのは、精神遅滞、脳性麻痺、自閉症、てんかんなどを有する患者様や、また、感覚器の障害によって視覚や聴覚に障害を有する患者様です。後天的な障害、例えば脳血管障害による認知症(痴呆)や肢体不自由を随伴した患者様はリラックス治療外来で拝見します。障害者歯科外来では全身管理を歯科麻酔科医が、歯科治療を小児歯科医が担当しています。そのうち、障害者歯科外来Iでは全身麻酔、静脈内鎮静法など歯科麻酔科医による高度の全身管理が必要な患者様を中心に診療しています。障害者歯科外来は、むし歯や歯周病の治療まで一貫した治療を行うとともに、その後も定期的に来院して頂く事によって予防にも力を入れています。

障害者歯科外来

東京歯科大学千葉病院では障害者歯科外来 と が中心となって、障害を持つ方々を対象に歯科疾患に対する相談、予防および治療を行うことになりました。

障害者歯科外来 は小児歯科外来に併設されましたが、本外来の目的は、先天異常や周産期の異常によって知的障害や肢体不自由がある患者様に対し、行動調整(行動変容)を行いながら歯科治療に対する適応を高めること、そして良質な歯科治療や予防処置を行うことです。また当科では、治療が終了した後も齲蝕や歯周疾患の発生や再発を予防するため、定期的に受診して頂けるシステムを提供しています。すなわち、当科の理念は、口腔健康管理を継続的に行うことによって、歯科治療は「痛くない」「怖くない」ものとして認識して頂くこと。さらには、信頼関係を築き上げて障害を持つ患者様のQOL(生活の質)の向上を支援するということです。

なお、障害者歯科外来 には日本障害者歯科学会の認定医が4名常勤しておりますが、障害者歯科医療における地域の中核病院としての機能を果たすためには、Quality assurance(医療の質の保証)が必須です。そのためには、臨床各科の支

援が不可欠ですので、何卒よろしくおしいいたします。

口腔腫瘍外来

現在、当院口腔外科では年間約60例におよぶ口腔癌の治療をおこなっていますが、治療方針の困難さや術後の長期にわたる嚴重な経過観察の必要性は周知のごとく、高い専門性が必要な分野です。再発や転移による不幸な転帰を辿らないよう、また術後のQOLの向上を目指して口腔腫瘍外来が設置されました。

口腔腫瘍外来の目的は 口腔癌を早期に発見し適切な治療方針を決定すること、 厳密な定期観察を続け再発や転移の拡大を防ぐこと、 咀嚼、嚥下、発音など口腔機能障害を回復させることです。スタッフは口腔外科専門医12名(平成17年度現在)を中心に構成され、術前の治療方針では最新の化学療法レジメやTNM分類あるいは遺伝子診断を総合的に判断し、症例ごとの治療方針を決定します。放射線治療を選択する場合は市川総合病院や放射線医学総合研究所と連携し、また術後のフォローアップでは画像診断が不可欠であるため、週に一回歯科放射線科との合同カンファレンスをおこない総合的なチーム医療を実践しています。

唇顎口蓋裂外来

口唇裂・口蓋裂は口腔顔面で最も多い先天異常であります。特に唇顎口蓋裂患者に対しては、出生直後より成人にいたるまで臨床各科のチームアプローチ(集学的治療)による一貫した方針と計画に基づく治療を施し、社会復帰の手助けをする必要があります。

口腔外科では唇顎口蓋裂児に対し、Hotz床を作製して哺乳と初回手術前後の顎の管理を施し、引き続き、口唇裂と口蓋裂の一次手術を行っております。また、その後の顎に対しては矯正歯科が、歯に対しては小児歯科が、成長発育も併せてきめ細かな管理を行っております。

一方、あらゆる年齢層で種々な程度の障害や二次変形を示す患者、すなわち重度齲蝕、咬合異常、言語障害などを示し、二次手術や矯正治療を希望する患者も来院いたします。これらに対しても上記の三科による一貫治療を施しております。

ドライマウス外来

ドライマウス(口腔乾燥症)は唾液の量が減少したり、その性質が変化することにより生じ、ドライアイ(眼乾燥症)とともに様々な疾患に多く認められます。口腔乾燥症が生じると不快感だけでなく齲蝕の増加や歯周病の原因、さらに口臭や味覚の異常まで生じるとされています。最近では口腔乾燥症に対する社会的な関心も高まっています。口腔乾燥症ではシェーグレン症候群をはじめ、様々な疾患との関連性も考慮し、その病態を正確に把握することが重要です。口腔乾燥症・ドライマウス外来では、原因究明のために口腔乾燥症専用の医療面接、涙液分泌量検査、唾液分泌量検査を行い、シェーグレン症候群、膠原病などの疑いがある場合には、さらに血液検査、免疫学的検査および口唇腺の生検診断などを行います。

味覚異常外来

「口が常にすっぱい」、「唾液がしょっぱい」、「金属の味がする」、「最近、味付けが濃くなった、といわれる」あるいは「チョココレートが甘くない」などの患者の訴えが増えています。これらは専門的に味覚減退、自発性味覚異常、解離性味覚異常とされています。味覚異常の患者数は全国で39万人(2001年推計)あり、毎年14万人が医療機関を受診しているとされます。当味覚異常外来では、ろ紙ディスク法、全口診法、電気味覚検査による客観的な検査を行うとともに、血清亜鉛値や血清銅の検査も行います。味覚異常の原因は多様で、必ずしも治癒に至らないケースもありますが、口腔外科、耳鼻科と共同で治療と経過観察を行い、患者様の病状改善を目的としています。

歯科金属アレルギー外来

扁平苔癬や掌蹠膿疱症などの全身的な疾患に歯科金属アレルギーが関連しているとも言われています。しかしながら、現在の歯科治療において金属代替医療は必須のものです。歯科金属アレルギー外来では、歯科金属アレルギーの可能性のある患者様への病態説明とアレルギー検査を行っております。歯科金属アレルギー検査は、血液を用いるDLST(Drug Lymphocyte Stimulate Test)とパッチテストを行い、必要があれば、口腔内に存在する金属の成分分析を行い、病状の改善ならびにEBMに基づいた歯科治療に活用することを目的としています。

セカンドオピニオン外来

セカンドオピニオン外来の目的

千葉病院は、「安全良質な高度・先進医療を提供するとともに、積極的に病診連携を推進する社会に開かれた病院」という病院理念のもとに診療を行っていますが、このたびセカンドオピニオン外来を開院いたしました。当院以外の主治医にかかっている患者を対象に、診断内容や治療法に関して当院の各診療科の専門医・指導医が意見・判断を提供し、患者自身に参考にして頂くと共に、情報提供頂いた主治医の先生の下で納得して診療を受けてもらうことを目的としています。

セカンドオピニオン外来の原則

- 1) 診療内容や治療法に関して専門医の意見・判断を提供する。
- 2) 主治医からの情報提供書・検査資料等のないものは応じない。
- 3) 主治医に対する不満や医療事故に関する相談には応じない。
- 4) 当院での検査・治療は行わない。
- 5) 完全予約制とし、自費(5,000円/30分)とする。
- 6) 本人または本人の同意書を持参した者に限る。

法人役員の変更

平成17年5月31日をもって法人役員(寄附行為第8条第1項に規定する理事〔東京歯科大学の学長〕を除く)が任期満了を迎えることに伴い、5月27日開催の第634回理事会、第212回評議員会において、寄附行為第8条第2項に規定する理事並びに寄附行為第9条に規定する監事と、6月1日開催の寄附行為第8条第3項に規定する理事選任に関する会合において、寄附行為第8条第3項に規定する理事の改選が行われ、下記の方々を選任された。

新役員が選任されたことに伴い、6月1日開催の第635回理事会において新役員の互選により、第2項理事の井上裕理事が引き続き理事長に再選された。また、井上理事長は、寄附行為第15条に規定する「理事長の職務の代理及び代行を行う者」に金子謙理事(学長)を再指名した。

さらに同理事会において常務理事の選任並びに業務分掌が下記のとおり決定された。

新役員の任期は平成17年6月1日から平成20年5月31日までの3年間となる。

なお、寄附行為第8条第1項に規定する理事(東京歯科大学の学長)は、寄附行為規定役職者であり、任期(H16.6.1~H19.5.31)が異なるため、この度の役員改選には該当しない。

記

寄附行為第8条

【第2項理事(法人評議員から選任)】定数4名

井上 裕、熱田俊之助、鹿島 隆雄、
畠 亮 (以上4名再任)

【第3項理事(法人職員、学識経験者)】定数4名

井出源四郎、神谷 健一、鈴木 勲、
薬師寺 仁 (以上4名再任)

寄附行為第9条

【監事】定数2名

岡村 泰孝、大山 萬夫 (以上2名再任)

寄附行為第7条

【理事長】

井上 裕

寄附行為第15条

【理事長の職務の代理及び代行を行う者】

金子 謙

【常務理事】(業務分掌)

理事長(総括) 井上 裕
(学務・人事) 金子 謙
(校友) 熱田俊之助
(財務・庶務) 薬師寺 仁

本法人寄附行為施行細則第8条では、上記業務分掌の他に建設担当の業務分掌が規定されているが、現在のところ大規模な建設計画の予定がなく、財務の業務範囲で包括が可能であるとの判断から建設担当常務理事は、当面置かないこととしている。



井上 裕理事長



金子 謙常務理事



熱田俊之助常務理事



薬師寺 仁常務理事



井出源四郎理事



神谷健一理事



鈴木 勲理事



鹿島隆雄理事



畠 亮理事



岡村泰孝監事



大山萬夫監事

教授就任のご挨拶



市川総合病院
脳神経外科
菅 貞 郎

この度、教授会のご推挙により、平成17年6月1日付けをもちまして市川総合病院脳神経外科教授を拝命いたしました。今後の医療改革の方向性を見据えますと、市川病院の地域基幹病院としての役割、大学附属病院としての高度先進医療への貢献など、その責務の重大性に身の引き締まる思いでございます。

私が市川病院に助教として着任して3年が過ぎました。この間、私の専門分野である脳卒中診療を充実させたいと願っておりましたが、大学本部、市川病院関係各位のご尽力により、本年5月に脳卒中センターを開設することができました。皆様もご存じの通り、脳卒中診療は近々認可されるであろう血栓溶解薬の登場によって大きなパラダイムシフトを迎えることとなります。このような時期に、脳卒中センターを開設出来たことは誠に時宜を得たものと考えます。また、幸いにもリハビリ科が新設され、さらに歯科大学の特徴を生かした口腔嚥下訓練も充実してきており、近い将来、市川病院脳卒中センターから新しい脳卒中診療のエビデンスを発信出来るよう、精進を重ねたいと思います。

さて、昨今の医学教育の変革のなかで、医師としての責務と労働者としての権利の狭間で混沌としている部分があるように見受けられます。しかしながら医師の根本にあるのはやはり病める人を救うという使命感だと思います。私の人生訓の一つに「決して

世の中に無用の人となることなかれ」があります。これは江藤 淳の「漱石とその時代」のなかにあったもので、明治の教育勅語の一節です。漱石をはじめとした明治の人間の生き方の根っこにあったものだと思います。今の時代、世のため、人のためというのは古くさい気もしますが、医療人の原点として病める人への奉仕、献身を通して世の役に立つ使命感を若い先生方に伝えていくことも私の責務と考えております。

最後になりますが、今後も引き続き倍旧のご厚情を賜りたく、切にお願い申し上げます。

略歴

学 歴

昭和50年 3月 秋田県立秋田高等学校理数科卒業
昭和50年 4月 慶應義塾大学医学部入学
昭和57年 3月 慶應義塾大学医学部卒業
平成 2年 9月 医学博士の学位受領(慶應義塾大学)

免許・資格等

昭和57年 5月 第73回医師国家試験合格
昭和57年 6月 医籍登録 第269272号
昭和63年 8月 日本脳神経外科学会認定制度による脳神経外科専門医(第2435号)
平成15年 3月 日本脳卒中学会認定制度による脳卒中学会専門医(第20030222号)

職歴および研究歴

昭和57年 4月 慶應義塾大学医学部外科学教室 研修医(昭和59年4月まで)
昭和59年 5月 慶應義塾大学医学部外科学教室 専修医(昭和63年4月まで)
昭和63年 5月 国立東京第二病院脳神経外科 医員(昭和63年10月まで)
昭和63年11月 慶應義塾大学医学部脳神経外科 助手(平成元年4月まで)
平成元年 5月 足利赤十字病院脳神経外科 医員(平成2年7月まで)
平成 2年 8月 米国国立衛生研究所神経疾患脳卒中研究所留学(平成4年3月まで)
平成 4年 4月 脳血管研究所美原記念病院脳神経外科 医長(平成6年9月まで)
平成 6年10月 脳血管研究所美原記念病院脳神経外科 部長(平成9年4月まで)
平成 9年 5月 慶應義塾大学医学部脳神経外科 医長(平成11年3月まで)
平成11年 4月 慶應義塾大学医学部脳神経外科 専任講師(平成14年3月まで)
平成14年 4月 東京歯科大学市川総合病院脳神経外科 助教授

助教授就任のご挨拶



口腔外科学講座
高 木 多加志

このたび、教授会の御推挙により、本年6月1日付けをもちまして口腔外科学講座助教授を拝命いたしました。従来の口腔外科学第一講座、第二講座が統合し、口腔外科学講座として臨床、研究、教育と新たにスタートした重要な時期に、その重責に身の引き締まる思いしております。

特別研究生として口腔外科第一講座に入局して以来、野間弘康名誉教授をはじめ大森清弘先生、

高橋庄二郎先生、重松知寛先生など多くの諸先輩から教えをいただき、口腔外科の専門医としての研鑽を積んでまいりました。これを基盤として、咬合の再構築とくに顎顔面骨格異常にもとづく顎変形症を中心に、その治療と研究に励んでまいりました。

近年、学校歯科保健への咬合異常への取り組みの定着化や矯正治療専用のインプラントを併用した矯正治療(インプラント矯正)の発展など、これまで口腔外科医の関わることに限られていた成長発育期の矯正治療や成人矯正治療などへの新たな関わりや治療のなかで、矯正治療、歯周治療、補綴治療、デンタルインプラントなどの関連した他科との協力体制がますます重要になりつつあります。外科矯正治療、インプラント矯正治療ともに、千葉病院では顎変形症外来を中心とした関連他科、地域では矯正歯科医療機関との連携を密にする病診連携を中心とした診断・治療計画のシステム作りは、他大学に遅れ

ている分野であり、積極的に関わってゆきたいと考えております。

また、臨床と研究の融合として、咬合異常からみた顎骨の成長発育と形態形成を制御する遺伝子や蛋白の解析、あるいは医学部の整形外科領域で発達してきた生体工学分野に相当する三次元情報を利用した研究と臨床応用についても、顎変形症の生体機能と咬合を融合させた研究システムや診断システムを作り上げることは、歯科医学の役目であり矯正歯科、スポーツ歯科、補綴科などと共同での生体工学解析による結果をEBMに基づいた治療の概念に応用できるところまで勤めてゆくことを他大学に先駆けて推進してゆきたいと考えています。

微力ではありますが、東京歯科大学の発展に少しでもお役に立てるよう努力していきたく思います。今後とも一層の御指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



口腔健康臨床科学講座
(小児歯科学分野)

大多和 由美

このたび、教授会のご推挙により、平成17年7月1日付けで口腔健康臨床科学講座小児歯科学分野助教授を拝命いたしました。その重責に身の引き締まる思いしております。大学を卒業して以来、町田幸雄名誉教授、薬師寺仁教授に師事し、多くの諸先輩、同僚、後輩、パラデンタルスタッフに支えられ恵まれた環境で小児歯科医として研鑽を積んで参ることができました。今後は、これらの経験をもとに新しい講座の中での小児歯科学分野を築き上げてまいります。

臨床におきましては、少子化時代の都市型二次医療機関の小児歯科として時代のニーズにあった診療を進めてまいります。一つには、予防を中心とした小児からの長期口腔管理です。咬合管理の領域では、矯正歯科谷田部教授のご指導のもと平成11年度より始めました矯正歯科との連携により、従来の小児期の咬合誘導治療をさらに進める

ことが可能になりました。今後さらに総合的な顎顔面の発育や歯の萌出異常が認められる疾患について、共同治療の道を模索したいと考えています。また、4月から池田正一客員教授をお迎えし、障害者歯科部門の強化をはかり始めたところです。

口腔健康臨床科学講座は、柿澤卓教授のもとに各分野の専門医を中心とした水道橋病院歯科全体の特殊な臨床講座です。院内他科との協力体制を確立し、口腔健康臨床科学講座ならではの教育体制を確立していきたく思います。講座の責務である臨床研究の構築等、多くの課題があり、診療各科、講座一同を挙げて進みたいと思います。

微力ではありますが、東京歯科大学および口腔健康臨床科学講座の発展に少しでもお役に立てるよう努力することを誓い、助教授就任のご挨拶とさせていただきます。今後とも皆様には、一層のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願いを申し上げます。

学内ニュース

博士(歯学)学位記授与
第541回(平17.6.15)授与

第516回(平15.3.19)合格

原 宣 道(口 外) 第1553号・甲876号

第524回(平15.12.10)合格

崎 山 浩 司(解 剖) 第1578号・甲892号

第527回(平16.3.17)合格

白 鳥 清 人(病 理) 第1590号・甲900号

志 田 剛(解 剖) 第1596号・乙692号

第533回(平16.10.13)合格

梨 本 正 憲(病 理) 第1614号・乙699号

第535回(平16.12.8)合格

小野寺 博 子(保 存) 第1619号・甲919号

第542回(平17.7.13)授与

第518回(平15.5.7)合格

松 木 美和子(病 理) 第1560号・甲880号

第530回(平16.6.9)合格

石 川 博 基(病 理) 第1606号・乙696号

第538回(平17.3.23)合格

恩 田 尚 余(児 歯) 第1635号・甲934号

第112期生登院

平成17年4月4日(月)午前9時から千葉校舎第2教室において、平成17年度第112期生登院式が挙行された。佐藤亨臨床教育委員長の司会のもと石井拓男千葉病院長から臨床実習開始にあたり、より一層歯科医療スタッフの一員である自覚を持つよう訓示が述べられた。引き続き、久保周平千葉病院医局長会幹事の司会のもと臨床実習に関するオリエンテーションが行われ、佐藤臨床教育委員長の総括説明の後、各科医局長、臨床実習関連部門からの説明、諸注



オリエンテーションに真剣な表情で聞き入る第112期生：平成17年4月4日(月) 千葉校舎第2教室

意があり、最後に中川寛一第5学年主任の挨拶、諸注意をもって終了した。6月10日(金)には、第111期生との引継ぎを終え本登院が開始され、第112期生は、いよいよ本格的な臨床実習に臨み始めた。

第207回大学院セミナー開催

平成17年6月1日(水)午後6時から千葉校舎第2教室において、第207回大学院セミナーが開催された。今回は、School of Dentistry, University of California San FranciscoのErnest Newbrun名誉教授をお招きし、「Cariology: past, present and future」と題した講演を伺った。先生は、名著である「Cariology」の著者であり、Cariologyの研究分野を基礎的のみならず臨床的に極めて高いレベルで推し進めてきた。また、フッ化物応用についても「Fluorides and Dental Caries」の著作のある先生である。

講演は、う蝕の原因について、5千年前のパピロニアの歯の寄生虫の記載があるということから始まり、歯の虫がう蝕を作るという多くの伝説があるという話やアルストテレスは食物がう蝕を起こすことに気がついていたなどの話、また、1960年代に*Mutans Streptococci*が発見されてから現在までのう蝕予防方法のうち、特に*Mutans Streptococci*を抑制する方法論を丁寧に解説され、最後はこれからのCariologyの遺伝子技術を応用したう蝕診断法についても言及された。対象が大学院生ということであらかじめ講演のすべてのスライドのプリントも準備し下さり、大変わかりやすい英語でゆっくりお話しされ、参加者はよく内容が理解することができた。今回のセミナーは、80名を超える参加者があった。講演後には多くの質疑応答があり、本学で学ぶ大学院生らにとって有意義であった。



講演されるDr. Newbrun：平成17年6月1日(水) 千葉校舎第2教室

第279回東歯学会(例会)開催

6月4日(土) 千葉校舎において東京歯科大学学会(例会)が開催された。一般講演会場は第1・第2教室、示説講演は第2~5セミナー室を会場として発表された。学会において発表された一般講演は38題、示説講演は10題であった。また午後1時から、特別講演3題が第1教室にて行われた。

特別講演

1. 歯科医療における歯科麻酔科医の役割 - 現状と将来展望

一戸達也教授(東歯大・歯麻)

2. 癌治療における放射線治療の役割

青柳 裕教授(東歯大・市病・放射線科)

3. 眼内レンズインプラント

ピッセン宮島弘子教授(東歯大・水病・眼科)

また、参加商社による商品展示が第1ラウンジで行われた。



第279回東歯学会風景：平成17年6月4日(土) 千葉校舎第2教室

第208回大学院セミナー開催

平成17年6月9日(木)午後6時から千葉校舎第2教室において、第208回大学院セミナーが開催された。今回は、九州歯科大学 健康増進学講座総合内科学分野の高田 豊教授をお招きし、「内科医からみた8020達成の意義」と題した講演を伺った。

現在、わが国は世界に類をみないスピードで高齢化が進んでおり、また、わが国の歯科界は8020運動を推進している。「8020」が達成されると、「狭心症や心筋梗塞症を予防する」「介護必要度を下げる」「痴呆や動脈硬化を防ぐ」など、さまざまな健康増進に繋がることが期待されているが、高い評価に繋がるEBMは決して多くない。高田教授は、Journal of Dental Researchなどで、8020を

達成し口腔機能が維持されているグループは、心電図などからみても有意に健康状態が良好であることを発表しており、EBMに繋がる内容を中心に講演していただいた。また、歯科と医科の垣根なく、健康科学に一体となって取り組んでおられる研究姿勢を知ることができた。九州歯科大学では、内科医が5人勤務しており、高田教授らは、口腔衛生学や細菌学講座などと密接な関わりを持ち、長期的な疫学調査などを中心とした臨床研究を推進しており、Journal of Oral Rehabilitationなどにも次々と論文を発表しておられる。

歯科界が目指している8020達成の意義に関する今回のセミナーは、本学で学ぶ大学院生らに大きなインパクトを与えてくれた。



講演される高田先生：平成17年6月9日(木) 千葉校舎第2教室

平成17年度学生健康診断実施

平成17年度学生健康診断が以下のとおり実施された。

第1学年及び第2学年学士編入者

実施日：6月10日(金)

実施項目：身長、体重、視力、聴力、検尿、採血、
血圧、X線撮影、内科、歯科診断、心電図、ツベルクリン反応検査

第2学年(学士編入者を除く)

実施日：6月9日(木)

実施項目：身長、体重、視力、検尿

第3学年

実施日：6月9日(木)

実施項目：身長、体重、視力、検尿

第4学年

実施日：6月10日(金)

実施項目：身長、体重、視力、検尿、採血、X線撮影、内科、歯科診断

第5学年

実施日：6月6日(月)

実施項目：身長、体重、視力、検尿、採血

第6学年

実施日：6月10日(金)

実施項目：身長、体重、視力、検尿、X線撮影

平成17年度解剖諸霊位供養法会

平成17年6月14日(火)午後2時30分より、水道橋校舎血脇記念ホールにおいて平成17年度解剖諸霊位供養法会が執り行われた。

金子 譲学長はじめ大学幹部、関係教職員、第3学年学生、歯科衛生士専門学校教員および学生代表、ご遺族ならびに東京歯科大学白菊会の方々が参列し、歯科医学の教育と研究のため尊いご意志を持って献体戴いた諸霊位に対し感謝を捧げ、ご冥福をお祈りした。本学開設以来、4千有余柱の御霊に向かい真珠院石井道彦導師の誦経に続き、金子学長が祭文を奉読し、参列者全員の献花が行われた。

続いて、解剖学講座主任の井出吉信教授の挨拶、ご遺族を代表して大多和 祐様の挨拶があり、本年度の解剖諸霊位供養法会を滞りなく終了した。

その後、ご遺族並びに大学関係者が文京区小石川の真珠院を墓参され散会した。



祭文を奉読する金子学長：平成17年6月14日(火) 水道橋校舎血脇記念ホール

第209回大学院セミナー開催

平成17年6月16日(木)午後5時から千葉校舎第2教室において、第209回大学院セミナーが開催された。今回はオランダからDepartment of Periodontology and Biomaterials, University Medical Center NijmegenのJ. A. Jansen教授を講師にお迎えして「Tissue engineering of bone」と題する講演を伺った。

骨髄の間葉系細胞あるいは骨髄、歯髄、歯根膜の幹細胞を用いた硬組織の組織工学を検討するとともに、(TGF)- β やBMPを用いて骨誘導あるいは骨伝導についての講演であった。さらに、近年注目されてきているplatelet-rich plasma(PRP) 応用による骨の創傷治癒についての考察がされた。質疑時間では、組織工学や骨系細胞を主テーマにしている大学院生等から歯根膜の創傷治癒における幹細胞の動態やメカニカルストレスの組織工学への応用、組織工学の評価として細胞のマーキング法など活発な意見や質問がなされ、大変内容の濃い有意義なセミナーであった。



講演されるProf. Jansen：平成17年6月16日(木) 千葉校舎第2教室

平成17年度実験動物供養祭

平成17年6月17日(金)午前10時40分より、千葉校舎基礎棟1階の第2ラウンジにおいて平成17年度実験動物供養祭が執り行われた。

供養祭は、廣徳院住職の読経に始まり、薬師寺 仁副学長が祭文を奉読された後、歯科医学の教育・研究に生命を捧げた動物諸霊に対し哀悼と感謝の意を込め、教職員、大学院生、第3学年学生全員が順次焼香を行い、滞りなく終了した。



祭文を奉読する薬師寺副学長：平成17年6月17日(金) 千葉校舎基礎棟第2ラウンジ

父兄会定時総会・修学指導方針説明会開催

平成17年度父兄会定時総会が6月18日(土)に、千葉校舎講堂において開催された。総会は約450名の保護者の出席を得て午後12時40分、大久保 信男副会長の司会進行のもと開会した。

まず始めに、本年4月に新会長として就任した吉田 昊哲父兄会会長の挨拶があり、引き続いて名誉会長である金子 讓学長の挨拶、壇上の父兄会役員との紹介が行われた後、第6学年保護者森岡俊介氏を議長に選出し、報告・審議に移った。平成16年度会計収支決算、平成17年度事業計画・会計収支予算などの議案が審議され、いずれも提案どおり可決された。引続き、任期満了に伴う役員改選が諮られ、選考委員会の議を経て、平成17年度父兄会役員を選出し、午後1時45分に閉会した。

なお、下記の方々に父兄会役員に就任していただき、本年度の父兄会運営の業務に携わっていただきます。

会 長：吉田昊哲

副会長：大久保信男、小山捷三、間 滋夫

常務理事(庶務)：大野 誠、青木栄夫

常務理事(会計)：上田祥士、佐々木高憲

常務理事(貸与)：今村嘉宣

常務理事(傷害)：腰原偉旦

常務理事(広報)：須田 希、呂 英美

理 事：西宮 寛、小鹿典雄、長野恭輔、
岡田孝枝、東郷幹夫、三友和夫、
佐久間研次、岡本裕子、深水千枝子、
藤岡雅嗣、臼田 準、鈴木伸宏

監 事：江里口 彰、安井 晃

顧 問：高市 武、槁本 健

なお、総会に先立ち、午前11時30分から厚生棟1階第一食堂において昼食会を兼ねた「全教授及び修学指導関係者と保護者との懇談会」が行われた。

また、父兄会定時総会終了後の午後2時から、大学主催による修学指導方針説明会が開催された。最初に講堂において、全学年の学生の保護者を対象に井出吉信学監、平井義人学生部長、小田 豊教務部長から本学の学生指導の基本的方針、生活指導、勉学指針について、それぞれの立場からの懇切な説明が行われた。

次いで午後3時30分からは各学年に分かれ、学

年主任あるいはクラス主任から学年ごとに個々の学年の現状、修学上の注意事項に関するより詳細な説明が行われた。さらに、説明終了後、出席保護者と学年主任・クラス主任との個別面談が実施された。



熱心に修学指導の話に聞き入るご父兄：平成17年6月18日(土) 千葉校舎講堂

第43回歯科医学教育セミナー開催

平成17年6月20日(月)午後6時から千葉校舎第2教室において、第43回歯科医学教育セミナーが開催された。今回は、「歯科医師臨床研修制度の概要とマッチングの流れ」と題し、臨床研修制度について詳しい説明が行われた。

一戸達也臨床研修委員長より、平成18年度から必修化される臨床研修制度について、徐々にその詳細が明らかになってきていることから、最新の情報が提供された。17年度の臨床研修実施の状況や新臨床研修制度の概要、医療安全対策、研修医の処遇、研修医志願者と研修施設のプログラムとのマッチングの概要、研修制度の問題点などについて詳しく説明が行われた。最後に、石井拓男千葉病院長より、マッチング運営委員会等の情勢についての話があった。当日は140名を超える参加



説明する一戸臨床研修委員長：平成17年6月20日(月) 千葉校舎第2教室

者があり、臨床研修制度の必修化による大きな変革への関心の大きさが押し量られた。

第210回大学院セミナー開催

平成17年6月22日(水)午後6時30分から千葉校舎第5教室において、第210回大学院セミナーが開催された。今回は九州歯科大学 口腔顎顔面外科学講座 形態機能再建学分野(口腔外科学第二講座)の高橋 哲教授を講師にお迎えして「顎関節疾患の病態形成における滑膜と細胞外マトリックスについての研究」と題する講演を伺った。

従来、顎関節症は非炎症性疾患と考えられてきたが、顎関節の円板の位置異常に起因する顎関節内障や骨・軟骨の変形を伴う変形性骨関節症には、滑膜炎や軟骨の変性など、他の関節同様に炎症性変化とそれに伴う基質の破壊が起こっていることが明らかとなってきた。しかし、滑膜細胞や軟骨細胞の細胞やマトリックスであるグリコサミノグリカンやヒアルロン酸が顎運動でどのような役割を担い、顎関節症などの疾患に伴ってどのように変化、変性していくかについての詳細は明らかになっていない。講演では、顎関節の滑膜と細胞外マトリックスの役割についてこれまでの知見と高橋先生らの一連の理論的な研究をご紹介いただき、さらに臨床における顎関節疾患の診断と治療への応用の可能性について考察をしていただいた。最後まで、多くの質問があった大変有意義なセミナーであった。



講演される高橋先生：平成17年6月22日(水)、千葉校舎第5教室

第211回大学院セミナー開催

平成17年6月30日(木)午後5時30分から千葉校舎第2教室において、第211回大学院セミナーが開催された。今回は愛知県開業の月星光博先生を講

師にお迎えして「難治性歯内療法疾患における意図的な歯の再植と移植法の応用」と題する講演が行われた。

自家歯牙移植を成功に導くための生物学的原則の確立と、多くの長期症例に裏付けられた臨床的予知性の高さから近年自家歯牙移植が見直されつつある。自家歯牙移植は、同一個人においてある部位から別の部位へ外科的に歯を移動する処置であり、同じ歯槽窩内で歯の位置や傾斜を変更する外科的矯正もこの範疇に含まれる。また、何らかの理由によりいったん歯を抜歯し、口腔外で治療を行った後に元の抜歯窩に戻すような治療、すなわち意図的再植も自家歯牙移植の一つと考えられる。講演では、主に、通常の根管処置では治療が困難な症例における自家歯牙移植、意図的再植、外科的挺出の有用性について、多くの症例を用いて分かりやすく解説が行われた。当日は会場が満席となる140名超の参加者を得て大盛況で、大変内容の濃い有意義な1時間半のセミナーであった。



講演される月星先生：平成17年6月30日(木)、千葉校舎第2教室

入試ガイダンス開催

東京歯科大学への入学を希望する受験生を対象として、平成17年7月2日(土)午後2時から水道橋校舎血脇記念ホールで、第2回入試ガイダンスが開催された。

ガイダンスでは、液晶プロジェクター・ビデオ等を用いて、東京歯科大学の歴史・教育理念や教育カリキュラム、国家試験合格状況、卒後進路状況、口腔科学研究センター・三病院の概要等について紹介し、また、平成18年度入学試験の概要について説明した。その後、水道橋病院の教員の案内により病院見学を行い、希望者については教務部・学生部の教員との個別面談を実施した。当日

は48名の参加があり、個別面談希望者の行列ができるなど本学の情報を得ようという熱気に溢れ、盛況なガイダンスであった。

今年度は第1回を5月7日(土)という早い時期に開催しており、28名の参加があったが、今後のガイダンスは8月6日(土) 9月24日(土)に水道橋校舎で、8月27日(土) 10月30日(日)には千葉校舎で開催し、8月27日には初めて体験実習を実施する予定である。

第9回水道橋病院・市川総合病院合同OSCE開催
水道橋病院におけるOSCE(客観的臨床能力試験)は、例年市川総合病院との合同で都立医療機関の研修医も参加して開催されている。9回目にあたる今回は7月2日(土)に、水道橋病院・市川総合病院・東京都立豊島病院・東京都老人医療センターの歯科臨床研修医23名が参加して行われた。

ステーションは4箇所設置され、反対咬合の患者への医療面接、抜歯後の注意・説明、印象採得、レントゲン写真を用いた所見および処置方針の説明の4課題が出題された。研修医は皆緊張した面持ちで真剣に課題に取り組んでいた。

終了直後に評価者および運営委員による反省会を行った。水道橋病院・市川総合病院の教職員が協力して円滑な運営を行った点については好評であったが、準備段階、出題内容等についての問題点も指摘され、今後の課題となった。



OSCEの課題に取り組む受験者：平成17年7月2日(土) 水道橋病院

第212回大学院セミナー開催

平成17年7月6日(水)午後6時30分から千葉校舎第1教室において、第212回大学院セミナーが開催された。今回は、昭和大学歯学部歯科矯正学講

座の榎 宏太郎教授をお迎えし、「コーンビームX線CTから患者ロボットの開発まで：問題点解決を目的とした研究戦略」と題する講演を伺った。

アングルが上顎第一大臼歯を咬合の鍵と称して不正咬合を分類しているが、その第一大臼歯をどこにおくのが正しい治療なのかという点から話が始まった。咬合の解析に3D FEMやシミュレーション技術を応用し、コーンビームX線CTを開発した裏話をまじえ、生体力学を基盤とする新しい診断法、治療法を披露していただいた。また、早稲田大学と共同開発している咀嚼ロボットを用いると、近い将来患者の咀嚼機能を客観的に評価する方法ができるかも知れないと夢のある内容であった。さらに、講演は親子類似性の遺伝子解析に及び、内容の豊富な大変有意義なセミナーであった。



講演される榎 先生：平成17年7月6日(水) 千葉校舎第1教室

第2回歯科医学史に学ぶ会開催

7月12日(火)「第2回歯科医学史に学ぶ会」が水道橋校舎2階会議室で開催された。今回は演題を『野口英世ゆかりの細菌検査室の過去と現代(その1)』とし、野口博士が赴任していた横浜海港検疫所・細菌検査室の保存に尽力した小暮葉満子女士にご講演をお願いした。

初めに当会の幹事長である森山徳長先生が、挨拶を兼ねて、野口博士と本学との関わりについてお話があり、次いで小暮女士より保存運動の経緯を振り返ったお話が披露された。荒れるにまかせていた細菌検査所を見るに見かね、一念発起して保存運動を始めたこと。陳情活動は横浜市や神奈川県に対してはもちろん、国に対しては厚労省、そして国有地であったので財務省に対しても働きかけなければならず、複雑であったこと。陳情活動と並行してボランティアによる清掃作業(55回)や検査室の補修・

塗装工事(5回)、講演会・展示会・映画の開催(2回)そして機関誌「ながはま」(23回、誌名は所在地「横浜市金沢区長浜」による)の発行など、如何に熱心にそして粘り強く活動が続けたか、当日の参集者20余名みな様に感銘をもってお話を伺った。周辺はいま「長浜・野口記念公園」として整備され、園内の検査室や検疫所本館も一般公開されている。会は引き続き「野口英世細菌検査室保存会」として、ここを拠点に活動を続けているそうである。

最後に森山先生から謝辞と次回開催の日程(11月10日)など案内があり、予定を大幅に過ぎての散会となった。

櫻井 学講師最優秀演題賞を受賞

平成17年7月14日(木)~15日(金)に英国ブリストルで開催された第10回The Association for Low Flow Anaesthesiaの学術大会において、歯科麻酔学講座の櫻井 学講師が発表した"A simple low-flow anesthetic gas delivery system that really minimizes anesthetic gas consumption"が最優秀賞を受賞した。選考方法はポスター展示と10分間の口頭発表を行い、最優秀賞を選択するという形式であった。この研究は低流量麻酔の研究であり、福永敦翁客員教授が考案した麻酔回路を用い、千葉病院と水道橋病院の共同で行われた。

低流量麻酔は、麻酔薬の使用量を減少させることによる経済性、麻酔薬の漏出・排出量を減少させることによる手術室汚染の予防・環境保護、および患者の安全性を重視した麻酔法である。本学会は、ヨーロッパを中心とした低流量麻酔の専門学会であり、今回の受賞の意義は高い。臨床へのフィードバックが期待される。



最優秀演題賞を受賞した櫻井 学講師(左)

平成17年度教育ワークショップ開催

平成17年7月15日(金)午後2時より千葉校舎第2教室において、平成17年度教育ワークショップが開催された。今年度は「歯科大学における語学教育」「歯学における準備教育 - 物質の科学 -」「歯学教育モデル・コア・カリキュラムを踏まえた歯科臨床概論」の3つをテーマとし、井出吉信学監の開会の辞、金子 讓学長の挨拶に続き、小田 豊教務部長の司会のもと、作業グループの発表及び討議がシンポジウム形式で行われた。

「歯科大学における語学教育」「歯学における準備教育 - 物質の科学 -」「歯学教育モデル・コア・カリキュラムを踏まえた歯科臨床概論」の各作業グループ委員長の橋本 貞充 助教授、佐藤 裕 助教授、佐野 司 教授を中心に昨年10月から検討を重ねてきた結果について発表が行われた。各テーマおよそ1時間ずつの発表および質疑応答が行われ、既に17年度から実施している科目や18年度から実施予定の科目の具体的な授業内容や計画、学生へのアンケートから得られた分析結果、歯科大学、歯科医師に求められる“Needs”分析からの将来構想などこれまでの作業グループでの検討内容が発表され、会場からも多くの質問、意見、激励の言葉があり、今後の本学のカリキュラム構築・改善に向けて貴重な討論の場となった。150名を超える教育職員やティーチング・アシスタントが参加したワークショップは、最後に薬師寺 仁 副学長の閉会の辞で締めくくり、午後5時40分盛会の内に終了した。

テーマ

1. 歯科大学における語学教育

委員長：橋本 貞充 助教授(病理)
 委員：柴家 嘉明 助教授(英語)
 清水 真哉 助教授(独語)
 加藤 哲男 助教授(微生物)
 関口 浩 助教授(児歯)
 J. Williams 助教授(HRC)
 片倉 朗 講師(口外)
 杉戸 博記 講師(保存)
 山本 康人 助手(生化)

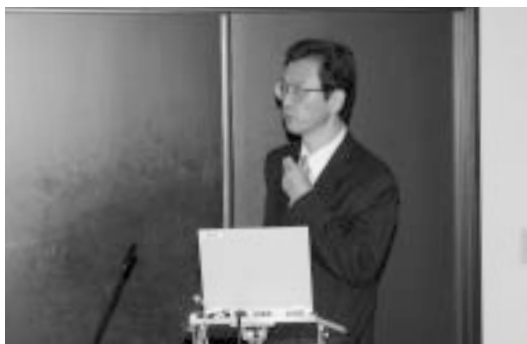
2. 歯学における準備教育 - 物質の科学 -

委員長：佐藤 裕 助教授(生化)
 委員：見明 康雄 助教授(超微)
 吉成 正雄 助教授(理工)
 田崎 雅和 助教授(生理)

望月 隆二 助教授(物理)
 小澤 誠 助教授(化学)
 澤木 康平 講師(薬理)
 西川 慶一 助手(歯放)
 宮下 有恒 助手(補綴)
 武藤 由剛 助手(保存)
 武本 真治 助手(理工)

3. 歯学教育モデル・コア・カリキュラムを踏まえた 歯科臨床概論

委員長：佐野 司 教授(歯放)
 委員：櫻井 薫 教授(補綴)
 一戸 達也 教授(麻酔)
 河田 英司 助教授(理工)
 阿部 伸一 助教授(解剖)
 矢島 安朝 助教授(インプラント)
 高橋 俊之 講師(補綴)
 櫻井 学 講師(麻酔)
 村松 敬 講師(病理)
 服部 雅之 講師(理工)
 杉山 利子 講師(総合診療科)
 顧問：井出 吉信 学監
 石井 拓男 千葉病院長
 小田 豊 教務部長



発表する高橋講師：平成17年7月15日(金)、千葉校舎第1教室

口腔健康臨床科学講座発足祝賀会および水道橋病院サマーパーティー開催

平成17年7月15日(金)午後6時30分より、東京グリーンホテル水道橋にて「口腔健康臨床科学講座発足祝賀会および水道橋病院サマーパーティー」が開催された。本会は、例年サマーパーティーとして開催しているが、今回は口腔健康臨床科学講座の発足後第1回目であるため、「発足祝賀会」と銘打っての開催となった。

堀田宏巳講座幹事の司会により進行し、柿澤卓講座主任・水道橋病院長の挨拶に続き、熱田俊之助法人常務理事の発声により乾杯した。また、会の途中には、金子讓学長が公務を終えて駆けつけ、講座発足に対する祝辞と教職員への慰労の言葉を述べられた。参加した教職員は大いに懇親を深めるとともに、講座発足の喜びを噛み締め合った。



柿澤講座主任・水道橋病院長の挨拶：平成17年7月15日(金)、東京グリーンホテル水道橋



祝賀会風景：平成17年7月15日(金)、東京グリーンホテル水道橋

大学院夏期ベーシックセミナー開講

基本的な研究技術の修得を目標とした大学院ベーシックセミナーが、春期に引き続き夏期ベーシックセミナーとして2回にわたり開講された。第1回目として平成17年7月19日(火)～21日(木)に衛生学講座の松久保隆教授、杉原直樹講師による「生物統計学入門講座」、続いて7月22日(金)、25日(月)、26日(火)に法歯学講座の水口清教授、生化学講座の太田一正助手による「遺伝子操作の基本手技」が開講された。「生物統計学入門講座」ではノートPCを用い、基礎統計やデータの統計分析方法等について、「遺伝子操作の基本手技」ではRNAの抽出とRT-PCR、DNAの抽出と塩基配列決定等につ

いて、実習形式のセミナーが行われ、大学院1年生を中心に今後の研究生活に向けて貴重な経験を積んだ。



遺伝子操作の基本手技の実習風景：平成17年7月25日(月)、千葉校舎基礎歯学実習室

第44回歯科医学教育セミナー開催

平成17年7月21日(木)午後6時から千葉校舎第2教室において、第44回歯科医学教育セミナーが開催された。今回は、本学を昭和62年にご卒業の加藤賢祐先生(神奈川県開業)を講師にお招きし、「臨床写真の撮影法 - 適切な視覚素材を作るために - 」と題した講演を伺った。

加藤先生は、本学同窓会の学術委員としても活躍しておられるが、そこで講演等をしている内容をベースにお話しされた。写真を撮るきっかけとなったのは、「その写真で何を聞きたいかわからない」という先輩からの一言だったとのことである。そこで写真を撮る際の留意点として、「何を表現したいのか」を明確にすること、撮影補助器具を効果的に活用すべきこと、経年変化がわかりやすいように同じ方向から撮るべきことを挙げられた。また、患者さんがつらくならないようにできるだけ一瞬で済むよう配慮が必要であるとのことであった。当日は、動画も交



講演される加藤先生：平成17年7月21日(木)、千葉校舎第2教室

えながら、非常に具体的に実践的なお話をしていたが、特に若手の医局員の方には有意義なセミナーであった。

東京歯科大学臨床教授の称号付与

平成17年7月26日(火)、千葉校舎特別会議室において、金子 譲学長より、東京歯科大学臨床教授の称号が4名の先生に授与された。本年5月に新設された千葉病院口腔インプラント科に添島義和先生が、千葉病院並びに水道橋病院両院の口腔インプラント科に飯島俊一先生、椎貝達夫先生、武田孝之先生がそれぞれ8月1日付、臨床教授として任用されることとなる。

臨床教授は、本年度4月1日に施行された、「東京歯科大学臨床教授等の称号付与に関する規程」に基づき、学外の医療機関等における豊富な臨床経験、臨床能力並びに教育能力を有し、人格的に優れた歯科医師に対し、付与する称号である。本学の臨床歯科医学教育、研修及び診療に協力を願い、教育・指導体制の更なる充実を図ることを目的とするものである。



左より添島義和先生、椎貝達夫先生、飯島俊一先生、武田孝之先生

第213回大学院セミナー開催

平成17年7月27日(水)午後6時から千葉校舎第3教室において、第213回大学院セミナーが開催された。今回は、Thomas Jefferson大学整形外科講座基礎研究部門の小山英樹先生をお迎えし、「頭蓋の発生におけるIndian hedgehogの役割」と題する講演を伺った。

小山先生の研究グループは、軟骨や骨形成における各種遺伝子の役割に関する一連の研究を行っており、今回は頭蓋底部の発生、手指関節部の発生、顎関節部の発生に関するメカニズムについて、

四肢、体幹の軟骨原基に発現し、骨格形成過程で重要な役割を担っているIndian hedgehog (IHH)のノックアウトマウスを用いて得られた分子生物学的な最新の知見を分かり易く解説していただいた。顎顔面領域の骨形成過程には膜性骨化および軟骨内骨化があるが、部位によって形成過程が異なり、それぞれが有機的かつ機能的に関与している研究成果を提示された。今回の内容は、形態や機能的な所見から得られる結果を分子レベルで詳細な解析を行うことの重要性を再認識させられるものであった。大学院生の他にも多くの教員の参加があり、またセミナー終了後も質疑が活発に行われ、大変に内容の濃い有意義なセミナーであった。



講演される小山先生：平成17年7月27日（水）、千葉校舎第3教室

第214回大学院セミナー開催

平成17年7月28日（木）午後6時から千葉校舎第3教室において、第214回大学院セミナーが開催さ

れた。今回は昭和大学歯学部 歯科理工学講座の宮崎 隆教授を講師にお迎えして「歯科用CAD/CAMの現状と課題」と題する講演を伺った。

「コンピュータ支援による設計・加工をキャドキャム（CAD/CAM：Computer Assisted Design and Computer Assisted Manufacturingの略称）と呼び、従来の歯科技工技術では加工が困難であったチタン、アルミナ、ジルコニアなど、生体親和性及び審美性に優れた材料の加工技術として欧米を中心に世界では急速にCAD/CAMの導入が進められている。」「我が国では健康保険制度などの制約があり、実用化が遅れているが、近年のインターネットの普及により、ネットワークを利用したシステムが登場し、技工の分業化やアウトソーシングが実用化されている。」など、歯科用CAD/CAMの開発状況や歯科医療の展望について真摯に語っていただき、大変有意義なセミナーであった。



講演される宮崎先生：平成17年7月28日（木）、千葉校舎第3教室

訃報

秋山 誠一郎名誉教授ご逝去

本学名誉教授（心理学）秋山誠一郎先生は、病气加療中のところ、平成17年7月14日にご逝去された。享年83歳。

秋山先生は、昭和23年3月に慶應大学文学部哲学科をご卒業され、その後慶應大学医学部神経科教室で助手として7年間勤務の後、昭和27年10月から東京歯科大学予科の非常勤講師として着任された。

また、昭和30年4月からは本学に新しく設置された進学過程の助教授就任、そして同36年4

月から教授に就任され、昭和57年3月に退職されるまで、心理学の教育に従事された。

秋山先生には、大学からは名誉教授の称号が授与され、また歯科衛生士専門学校からは名誉講師の称号が贈られた。また、退職後も茨城大学教授、明星大学教授を歴任され、臨床心理学会創設者のひとりとして貢献された。

先生の通夜は7月18日午後6時から、告別式は7月19日午前11時から、東京都渋谷区西原の代々幡斎場にてしめやかに執り行われた。

長期海外出張者報告

歯科矯正学講座 野村真弓助手

大学のご厚意により、平成16年5月26日(水)から、米国・テキサス州サンアントニオにあるテキサス大学ヘルスサイエンスセンターサンアントニオ校歯科矯正学講座に一年間留学させていただきました。サンアントニオは、米国内では長期滞在型の人気観光都市でアラモの岩、リバーサイドウォークで有名であり、人口約119万人、全米8位の中型都市です。気候は内陸性気候で朝夕の寒暖差が激しく夏は約40℃、冬は寒くても零下にはならない気候です。緑豊かな温暖な都市で研究をするには申し分のない環境です。

Rugh主任教授ならびにHatch教授のもとで、日本人、米国人ならびにアフリカ人について不正咬合者の軟組織プロファイルについての美的調和等について研究を行いました。またRugh主任教授は「Methodology」の講義を担当されており、研究計画立案・研究方法の確立・結果のまとめ方等を受講させていただき大変参考になりました。毎週水曜日には補綴・歯周・歯内・矯正科のレジデントにより症例検討が行われ、活発な

意見の交換が行われていました。

学生教育に関しましては、当講座は従来の講義・実習に加えてチュートリアルシステムを導入しており、実際の教育現場にも立ち会い見学させていただきました。

今回、このような長期海外出張の機会を与えて頂きまして、ご協力、ご尽力を頂きました方々に心より感謝申し上げますとともに、ここで得た知識や経験を生かして、研鑽に励む所存です。



主任教授 Dr. John D. Rughから診療室にてCertificate授与：平成17年5月20日(金)

トピックス

口腔外科学講座の論文がIF付き国際学術雑誌の表紙を飾る

本学口腔外科学講座の崔 念暉研究生の学術論文がClinical Cancer Research (Impact Factor 6.8)に掲載され、さらにその表紙を飾った。この雑誌は1995年創刊されたガンの症例研究誌で、実験室とガンの臨床研究の橋渡しをターゲットとする新しい企画の雑誌である。世界の研究機関で行われている膨大な基礎研究の成果を実際の臨床へと応用することが大きなテーマとなっている。ガン研究に携わる者にとって高嶺の花の存在でもある。First authorの崔 念暉は北京大学口腔医学院主治医師で日中笹川医学研究者制度の一人として平成15年4月から平成16年3月まで本講座に留学した。この期間に従来から教室で取り組んでいる「歯肉癌が顎骨へ浸潤するメカニズム」の研究に加わっていた。

短期間にも拘らず黙々と研鑽を積み、素晴らしい結果をだし今回の快挙を得た。論文のタイトルは"Effect of YM529 on mandibular invasion model by oral squamous cell carcinoma in mice"であり、その内容を紹介する。顎骨浸潤のメカニズムをより詳細に解析するためにマウス顎骨浸潤癌モデルの作成を試み、顎骨浸潤の過程を形態のみならず分子生物学的にも明確にするとともに顎骨浸潤を抑制する戦略にまで言及した論文である。実験モデル作成には、マウス口底部扁平上皮癌由来細胞株のSCC をマウス咬筋内に移植しドラマチックに骨浸潤を惹起させることに成功した。試料の解析にはH-E染色およびTartrate-Resistant Acid Phosphatases (TRAP) 染色による病理組織学的観察、また破骨細胞関連サイトカインであるIL-6、TNF- α 、PTHrPの mRNAレベルでの発現状況の観察を行なった。その結果、

本モデルがヒトにおける顎骨浸潤のメカニズムを解明するために極めて有用であり、臨床的特長をよく反映しているものと考えられた。崔研究生の卓越した技能と根気良さによって実験計画は順調に遂行され、さらにもう一つの実験を本論文に加えた。Bisphosphonateの顎骨浸潤の抑制効果とサイトカインの発現についても解析を行ない、Bisphosphonateが破骨細胞に関連する種々の液性因子に作用する特異的かつ有用な薬剤であることを証明した。表紙を飾った病理組織写真はSCCによって引き起こされた顎骨浸潤をTRAP染色で破骨細胞を描出したものである。なかなか綺麗に破骨細胞を染色することができず脱灰法を変えたり、pHの調整をしたり、試行錯誤の苦労を重ねた末の結果である。彼の努力により、講座の研究レベルは向上し、他の研究員の刺激にもなった。さらに崔研究生のお陰で、彼の所属する北京大学口腔医学院と交流もでき、協同研究を継続中である。今回の表紙を飾った崔研究生の論文を通して、ますます日中の友好が高まり協力して、口腔ガン撲滅に一石が投げればと思う。

(口腔外科学講座 柴原孝彦)



表紙を飾った 『Clinical Cancer Research: Vol.11, No.7, April 1, 2005』

(株)格付投資情報センターによる格付取得
 本学は、(株)格付投資情報センター(以下R&I)に平成16年11月17日(水)に本学の格付けを依頼し、平成17年5月19日付けでR&Iより「A+」の格付けを取得した。この格付け符号の定義は、AAA、AA、A、BBB、BB、B、CCC、CC、Cの符号区分があり、上位格に近いものにプラス、下位格に近いものにマイナス表示をすることがあるとなっている。格付け取得については、通常は企業が経営基盤の対外的な伝達や資金の調達手段として利用するケースが多いが、本学の場合は今後の法人経営に活用していくことを主な目的とするものである。

格付けを取得にするにあたっては、まずR&Iより指定された大学基礎データ及び各種資料を作成・準備し、平成17年1月末に提出した。その後、同年3月16日(水)に市川総合病院、3月17日(木)に千葉校舎において実地視察およびヒアリング調査が実施され、最後に金子 譲学長とのトップミーティングが行われた。その結果に基づき、R&Iによる格付委員会の討議を経て、前記のとおり「A+」の格付けを取得した。そして6月8日(水)水道橋校舎にて格付け理由の説明が行われ、6月27日(月)東京証券取引所にて本学の格付けが公表された。

【格付け理由】

「日本で最も古い歯科大学。歴史と伝統を背景に、私立大学歯学部の中で高い評価を得ている。国家試験の合格率も良好で、今後も安定した学生募集力を確保できよう。2つの歯科病院に加え、歯科大学としては国内で唯一、医科総合病院を持つ。市川総合病院(千葉県)は拡張を重ね、法人の帰属収入全体の5割強を占めるに至っている。このため東京歯科大学の格付けは歯科大学としての側面のほか、病院の観点からも分析、評価している。法人全体の収支に対する病院の今後の貢献を注視していく。」

学生会ニュース

演劇部「幕の内」第7回公演も大盛況

演劇部「幕の内」第7回公演が平成17年7月1日(金)と2日(土)の2回に亘り、千葉校舎講堂で

行われた。

本学演劇部が今回演目にしたのは、大橋康彦・作「ゴジラ」。「ゴジラ」というタイトルとは裏腹に、実はテーマは「純愛」というこの作品は、1988年岸田国土戯曲賞を受賞した名作であり、こ

れまでも多くの劇団で上演されてきた。この名作を、主将の荒木優介君(4年)をはじめとする総勢9名の部員がテンポよく見事に熱演した。

毎年、定期的に行われている公演も7回目を迎え、講演前には何件も問い合わせが入るなど注目度もアップ。公演の二日目、2日(土)は天気にも恵まれ、近隣の住民、本学関係教職員及び本学学生など多くの観客は詰めかけ会場を賑わしていた。

また、部員たちの演技力にも格段の向上が見られ、次回へとつながる素晴らしい公演であったといえる。



セリフに情熱を込め迫真の演技：平成17年7月1日(金)、千葉校舎講堂

第37回歯学体結団式

第37回全日本歯科学学生総合体育大会夏期部門は、8月1日(月)から12日(金)まで12日間にわたり、九州歯科大学事務主管のもと、福岡県北九州市を中心に開催される。

大会を迎えるにあたり、7月4日(月)午後12時20分より千葉校舎講堂において、冬期部門を含む21競技部門のクラブ部員が一堂に集い結団式が挙行された。

まず金子 譲学長、平井義人学生部長から激励の言葉が贈られ、学生を代表して学生会運動部長の竹多要介君(第4学年)が挨拶した。引き続いて、水泳部の主将・三科祐美子さん(第4学年)が「日頃鍛えた心と技を遺憾なく発揮し、東京歯科大学の名に恥じぬようフェアプレーに努め、この大会で得た経験を"人間性豊かな歯科医療人"への成長の糧とすることを誓います」と決意の宣誓。続いて、歯学体副評議委員の岡田玲奈さん(第3学年)の司会進行のもと、各クラブ主将からも必勝と健闘を誓う頼もしい言葉が述べられ、昨年(総合6位)以上の成果へ向けて期待が高まった。

最後出席者全員で校歌を斉唱し、午後12時50分に閉式となった。



この日の決意を現実にも！剣道部は大会二連覇を誓う：平成17年7月4日(月)、千葉校舎講堂



ユニフォームに着替え、大会に向け思いを一つにする：平成17年7月4日(月)、千葉校舎講堂

関東医歯薬学生自動車連盟戦 第3戦RESULT
平成17年7月18日(月)関東医歯薬学生自動車連盟戦の第3戦が、茨城県は筑波サーキット・ジムカーナ場で開催され、本学自動車部が素晴らしい結果を残した。この連盟戦は年間7戦～8戦行われるもので、1戦毎の順位によってポイントが振り分けられ、年間王者を争っていくものである。そして今回、低排気量クラス(車の装備にほとんど差が無い条件で争われるため、運転者のドライビングテクニックで差がつくクラスと言われている)において蓮見卓真君(5年)が念願の初優勝。また、ラジアルクラスでは林 遼君(3年)が2位に入賞し、総合順位でも参加台数45台中3位に入るなど快挙を成し遂げた。なお、林君は第2戦においても7位に入賞しており今後の活躍が期待される。

林 遼君

「自動車部という何をしているかイマイチ想像できないかと思いますが、自分達は普段ガレージ

で整備をして、各地のサーキット（大体筑波サーキットや富士スピードウェイ）やジムカーナ場で医歯薬連盟戦をメインに活動しております。レースでは、僅かな操作ミスで順位が大幅に変わってしまうため、レース前は毎回毎回緊張します。コンマ1秒の差が命取りになるなかで、すばらしい結果を残すことができ大変良かったです。」



時には繊細に、時には大胆にサーキットを攻略した：平成17年7月18日（月）、茨城県筑波サーキット

第37回東歯祭実行委員会発足

第37回東歯祭は10月29日（土）・30日（日）の2日間の予定で開催される。以下のとおり組織された実行委員会は、今回のテーマとして「百花繚乱」を掲げ、精力的に活動中である。

実行委員会各部門責任者

実行委員長	逢坂 竜太	3年
副委員長	林 遼	3年
副委員長	中村 優	3年
財務部門長	岡本 裕之	3年
準備部門長	岡本江理奈	2年
パンフレット・ポスター部門長	鈴木 大貴	2年
広報部門長	矢島 由香	2年
企画部門長	森田 荘一郎	3年
展示部門長	辻 将	3年
貸出部門長	西須 大徳	3年
バザー部門長	忠岡 大樹	2年
EXPO部門長	水戸 武彦	3年
模擬店部門	勝俣 弾	3年

図書館から

「Books Pick UP」

平成17年7月1日（金）より「医者・歯医者が書いた読み物」をテーマとして掲示している。この掲示内容はホームページ上の「テーマ別図書リスト」からも、閲覧可能。

図書館では年4回、テーマを決めて、図書資料のポスター掲示とホームページ上への掲載を行っている。

本学教員著作リスト

（本学の教員名が標題紙に記載されているものに限る。）

山田 了 [ほか] 編「標準歯周病学 第4版」医学書院

中川 寛一 [ほか] 著「マイクロスコープによる歯内療法」クインテッセンス

石原 和幸 [ほか] 著「細菌検査を用いた歯周治療のコンセプト」医学情報社

一戸 達也, 井上 孝, 才籾 純一 [ほか] 著「一から学ぶ歯科医療安全管理」医歯薬出版

図書館ホームページから購入希望図書の申し込みが可能に

大学が発行するメールアドレスを持った利用者だけに限り、ホームページ上にある「購入希望図書申し込み」の画面から、購入希望図書の申し込みができるようになりました。申し込まれた図書は、毎月の図書委員会で購入の是非が検討されます。申し込みの際には「購入希望図書申し込み」の画面にある注意事項を、必ずお読みください。

PubMedがRSSサービス開始

PubMedがRSS 2.0 (Really Simple Syndication) 形式での更新情報の配信をはじめました。

RSSとはサイトの概要 (Webサイトの各ページのタイトル、アドレス、見出し、要約、更新時刻など) を記述するための形式のことで、この情報を表示するにはRSSリーダーが必要です。RSSリーダーは指定したRSS形式で書かれたサイトの最新情報を一定時間ごとに自動的にダウンロードし、更新があると記事へのリンクを表示してユーザに

知らせるソフトで、リンクをクリックすると目的の記事が表示されます。RSSリーダーは沢山の種類があり、そのほとんどはウェブから無料でダウンロードできます。

PubMedでの検索をRSSリーダーで利用するには、まず検索を行い、結果が表示されたらプルダウンメニューからRSS Feedを選択します。その後は画面の指示に従って手続きを行ってください。一度手続きを行えば、常にRSSリーダーで最新情報を受け取ることができます。

詳しくはNLM Technical Bulletin June 7, 2005 (http://www.nlm.nih.gov/pubs/techbull/mj05/mj05_rss.html) に掲載されています。

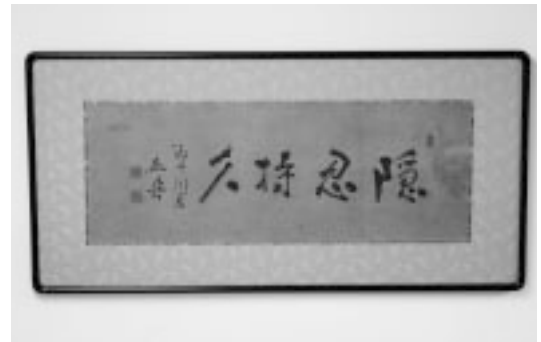
血脇守之助先生揮毫扁額のご寄贈

水道橋病院・槇石副院長の仲介により、本年6月、血脇守之助先生揮毫の扁額が寄贈された。「隠忍持久(いんにんじきゅう)為中川君(中川君の為に)血守」とある。本学を明治41年に卒業した中川大介先生を激励した言葉である。その言葉通り、東洋歯科医学校(現・日本大学歯学部)を創設した佐藤運雄先生(当時本学教員)のよき片腕として、30有余年にわたって学校の発展に尽

力され、また日本歯科医学会会長も務められた。

ご寄贈くださったご子息・中川圭介先生(都内北区赤羽在住)によれば、幼時の頃から自宅に掲げられてあったが、この揮毫が贈られた経緯は不明とのことである。

このように大活躍された同窓が大事にされた揮毫であり、本学にとってもきわめて貴重なものである。さすがに汚れ・破損が目立っていたため、修復を施したうえ、本学史料室に展示することとなった。未永く、大切に保管する。なお圭介先生は日本大学歯学部を卒業され、現在、東京都診療報酬支払基金常勤審査委員を務めている。



寄贈された扁額

歯科衛生士校ニュース

第7回FDワークショップ開催

平成17年6月11日(土)12日(日)の2日間、幕張プリンスホテルにおいて歯科衛生士専門学校第7回FDワークショップが開催された。今回は4年制大学におけるカリキュラム案の編成を目的として本校の教職員11名の参加により行われた。すでに4年制大学として歯科衛生士養成を始めている東京医科歯科大学および新潟大学では、社会福祉士の資格取得のための過程をカリキュラムに取り入れている。そこでまず淑徳大学総合福祉学部社会福祉学科講師の渋谷 哲先生を講師としてお招きして「社会福祉士資格の業務と養成課程」と題する講演を伺った。社会福祉士養成に必要な指定科目の時間数、教員数などの具体的な話は専門外の参加者にとって大いに参考になった。その後4年制での教育科目を4つの大きな領域に分け、それぞれの領域を担当する

グループに分かれて、カリキュラムの立案作業を行った。グループでの作業と全体での討議を繰り返し、2日間にわたるワークショップを終了したが、宿泊して夜まで集中して作業を行ったことにより大きな成果が得られた。



講演される渋谷先生：平成17年6月11日(土) 幕張プリンスホテル

第1回学校説明会開催

平成18年度に東京歯科大学歯科衛生士専門学校への入学を希望する者を対象とした学校説明会が、平成17年7月20日(水)に行われた。この説明会は、歯科衛生士という職業と本校の特徴を理解してもらい、できるだけ多くの受験生を募る目的で、平成8年から実施しているものである。これまで8月末と10月初めの2回開催していたが、進路を決めるための情報をなるべく早く伝えること

が好ましく、要望も多かったことから、本年は日程を早めて開催した。

歯科衛生士の職務・将来性、本校の歴史と特色、教育の内容などを紹介し、学校の施設、大学の施設、千葉病院の見学を行い、最後に平成18年度入学試験に関する説明を行った。当日は47名の受験生と保護者13名の参加があったが、説明会を通じて学校は、大学に併設されていることのメリット、3年制による教育の充実などを強調した。

人物往来

国内見学者来校

千葉校舎・千葉病院

旭川歯科学院専門学校(学生29名、教員2名)
平成17年6月27日(月)解剖学教室、病院、他見学

千葉看護専門学校(准看護科2年生45名、教員2名)
平成17年7月13日(水)解剖学教室、他見学

国際医療福祉専門学校(学生48名、教員3名)
平成17年7月14日(木)解剖学教室、他見学

藤リハビリテーション学院(学生64名、教員2名)
平成17年7月19日(火)20日(水)解剖学教室、他見学

太陽歯科衛生士専門学校(学生99名、教員3名)
平成17年7月20日(水)微生物学教室、他見学

千葉県立衛生短期大学(学生50名、教員1名)
平成17年7月21日(木)解剖学教室、他見学

八千代リハビリテーション学院(学生171名)
平成17年7月25日(月)~28日(木)解剖学教室、他見学

三重県立松阪高等学校(学生3名、教員1名)
平成17年7月29日(金)歯科麻酔学教室、千葉病院、他見学

海外出張

柴山和子研究助手(生化学)
ニューヨーク州立大学バッファロー校口腔生物学講座での共同研究のため、平成17年6月1日(水)出発。帰国は平成18年5月31日(水)の予定。

山口秀晴教授(歯科矯正)、末石研二助教授(水病・口腔健康臨床科学)

81st Congress of the European Orthodontic Society(第81回ヨーロッパ矯正歯科学会)で発表のため、山口教授は6月3日(金)から、9日(木)まで末石助教授は2日(木)から9日(木)までオランダ・アムステルダムへ出張。

野川茂助教授(市病・内科)
16th International Congress on Parkinsons Disease and Related Disorders(第16回パーキンソン病および関連疾患に関する国際会議)に出席のため、6月5日(日)から10日(金)までドイツ・ベルリンへ出張。

木津康博助手、岡崎雄一郎助手(市病・オーラルメディスン・口腔外科学講座)

Nobel Biocare World Conference(ノーベルバイオケア社 ワールドカンファレンス2005 インプラント学術会議)に参加のため、6月5日(日)から11日(土)までアメリカ・ラスベガスへ出張。

鈴木雄太助手(補綴)

ニューヨーク大学主催のNew York University College of Dentistry Continuing Dental Education Programs2005インプラントコース参加、およびニューヨーク大学臨床各科の臨床見学のため6月12日(日)から19日(日)までアメリカ・ニューヨークへ出張。

白石建教授(市病・整形外科)

スタイブ教授の脊椎人工椎間板手術見学、ARGOS(アルゴス)脊椎ミーティングにて講演、およびヨーロッパ国際頰椎学会で発表のため、6月12日(日)から19日(日)までフランス・ストラスブル、イタリア・ローマへ出張。

篠崎尚史講師(市病・角膜センター)
 アメリカアイバンク協会(EBAA)総会出席、Northwest Lions Eye Bankとのミーティングのため、6月13日(月)から22日(水)までアメリカ・サンディエゴ、シアトルへ出張。
 早川吉彦講師(歯科放射線)
 19th International Congress and Exhibition of Computer Assisted Radiology and Surgery(CARS2005)において、学術発表を行い、Round Table Discussionでパネリスト、およびCMI tutorial sessionで座長を務めるため、6月20日(月)から27日(月)までドイツ・ベルリン、フィンランド・ヘルシンキへ出張。
 山根源之教授、外木守雄助教授、渡邊 裕助手、上條 穂病院助手(市病・オーラルメディスン・口腔外科学)
 18th Congress of the International Association of Gerontology
 (第18回国際老年学会)で発表、および山根教授は評議委員会出席のため、山根教授、外木助教授は、6月23日(木)から7月5日(火)まで、渡邊助手は6月30日(木)まで、上條病院助手は7月6日(水)までブラジル・リオデジャネイロへ出張。
 金子 譲学長
 香港歯科医師会でのIFDAS2006の広報活動および香港大学歯学部視察のため、7月8日(金)から11日(月)まで中国・香港へ出張。

川島淳子助手(市病・皮膚科)
 International Short Course on Dermoscopy(ダーモスコピー講習会)出席のため、7月10日(日)から19日(火)までオーストリア・グラーツへ出張。
 櫻井 学講師(歯科麻酔)
 The 2005 meeting of The Association for Low Flow Anaesthesiaで発表のため、7月13日(水)から19日(火)までイギリス・ブリストルへ出張。
 阿部伸一助教授(解剖)
 Dr.Charles F. Shuler(University of Southern California)の研究室で、Krox20(嚙下関連筋発生の重要遺伝子)ノックアウトマウス試料作製収集後、Dr.Joseph Hoh(University of Sydney)にてミオシン関連Isoformの分析を行うため、7月19日(火)から9月29日(木)までオーストラリア・シドニー、アメリカ・ロサンゼルスへ出張。
 金子 譲教授(学長・歯科麻酔) 薬師寺 仁教授(副学長・小児歯科)
 台湾歯科医師会主催の講演に講師として参加のため、7月22日(金)から25日(月)まで台湾・台北へ出張。
 柳澤孝彰教授(口腔超微構造)
 キシリトールによる齲蝕予防のための啓蒙活動における講演を行うため、7月23日(土)から28日(木)まで台湾・高雄、台北へ出張。

大学日誌

平成17年6月

- | | |
|--|--|
| <p>1(水) リスクマネジメント部会
 感染予防対策委員会(ICT)
 MRSA院内感染対策委員会
 臨床検査部運営委員会
 輸血療法委員会
 教務部(課)事務連絡会
 千葉校舎課長会
 第207回大学院セミナー
 歯科衛生士専門学校職員会
 省エネルギーの日・防災安全自主点検日
 輸血療法委員会(市病)
 第3項理事選任の会合(法人)</p> | <p>4(土) 第279回東歯学会(例会)
 6(月) 学生健康診断(第5学年)
 前期職員健康診断(～10日)(市病)
 7(火) 臨床教授連絡会
 講座主任教授会
 人事委員会
 学生部(課)事務連絡会
 看護部運営会議(市病)
 8(水) 5年生前期授業終了
 救急委員会(市病)
 感染予防対策委員会(水病)
 医療安全管理委員会(水病)
 リスクマネジメント部会(水病)</p> |
|--|--|

- | | |
|--|--|
| <p>8(水) 個人情報保護委員会(水病)
薬事委員会(水病)</p> <p>9(木) 学生健康診断(第2・3学年)
第208回大学院セミナー
薬事委員会(市病)
口腔健康臨床科学講座会(水病)</p> <p>10(金) 学生健康診断(第1・4・6学年)
歯科衛生士専門学校健康診断(第1・2学年)</p> <p>11(土) 歯科衛生士専門学校FDワークショップ
(~6/12)</p> <p>13(月) 大学院事務連絡会
病院運営会議
高度先進医療専門委員会
医療用具治験審査委員会
個人情報保護委員会
医療安全管理委員会
感染予防対策委員会(ICC)
臨床教育委員会
医局長会
第2回個人情報の保護に関する研修会</p> <p>14(火) 解剖慰霊祭〔於:水道橋校舎〕
情報システム管理委員会
教養科目協議会
院内褥瘡対策委員会(市病)
給食委員会(水病)</p> <p>15(水) 5年生前期定期試験(2日目)
基礎教授連絡会
千葉校舎課長会
大学院運営委員会
大学院研究科委員会
環境清掃日
危険物・危険薬品廃棄処理日</p> <p>16(木) 第209回大学院セミナー
図書委員会
医療安全管理委員会(市病)
部長会(市病)
管理診療委員会(市病)
科長会(水病)</p> <p>17(金) 実験動物供養祭
前期職員健康診断予備日(市病)</p> <p>18(土) 父兄との懇談会
父兄会定時総会
父兄に対する修学指導方針の説明
各学年主任・クラス主任による説明</p> | <p>18(土) 学年主任・副主任による三者個別面談</p> <p>20(月) 機器等安全自主点検日</p> <p>21(火) 看護部運営会議(市病)</p> <p>22(水) 5年生前期定期試験(3日目)
第210回大学院セミナー
病院連絡協議会(水病)
院内情報システム検討委員会(水病)</p> <p>23(木) 検査室委員会(市病)
全体医局会(市病)</p> <p>27(月) 6年生第1回総合学力試験(1日目)</p> <p>28(火) 6年生第1回総合学力試験(2日目)
薬事委員会
データ管理者会議
カルテ整備委員会
診療記録管理委員会</p> <p>29(水) 第17回歯科衛生士部勉強会(水病)</p> <p>30(木) 第211回大学院セミナー</p> <p>平成17年7月</p> <p>1(金) 省エネルギーの日・防災安全自主点検日</p> <p>2(土) 入試ガイダンス(水道橋キャンパス)
水道橋病院・市川総合病院合同OSCE
(水病)</p> <p>4(月) 第37回全日本歯科学学生総合体育大会結団式</p> <p>5(火) 教務部(課)事務連絡会
看護部運営会議(市病)</p> <p>6(水) リスクマネージメント部会
感染予防対策委員会(ICT)
MRSA院内感染対策委員会
千葉校舎課長会
学生部(課)事務連絡会
第212回大学院セミナー
歯科衛生士専門学校臨床実習委員会
教職員研修会(水病)
口腔健康臨床科学講座会(水病)</p> <p>8(金) 全体課長会</p> <p>11(月) 学生夏期休暇(~8/31)
大学院事務連絡会
病院運営会議
高度先進医療専門委員会
医療用具治験審査委員会
個人情報保護委員会
医療安全管理委員
感染予防対策委員会(ICC)</p> |
|--|--|

- | | |
|--|---|
| <p>11(月) 医局長会
臨床教育委員会
第15回医療安全研修会
歯科衛生士専門学校1・2年生夏期休暇
(~8/31)</p> <p>12(火) 臨床教授連絡会
講座主任教授会
人事委員会
院内褥瘡対策委員会(市病)</p> <p>13(水) 基礎教授連絡会
大学院運営委員会
大学院研究科委員会
救急委員会(市病)
感染予防対策委員会(水病)
医療安全管理委員会(水病)
リスクマネジメント部会(水病)
個人情報保護委員会(水病)
薬事委員会(水病)</p> <p>14(木) 図書委員会
歯科衛生士専門学校職員会
薬事委員会(市病)</p> <p>15(金) 教育ワークショップ
環境清掃日
危険物・危険薬品廃棄処理日
看護部新採用者3ヶ月フォローアップ研修
(日本エアロビクスセンター 市病)</p> | <p>15(金) 口腔健康臨床科学講座発足祝賀会及びサ
マーパーティー(東京グリーンホテル水道
橋 市病)</p> <p>19(火) 大学院夏期ベシクセミナー (~21日)
看護部運営会議(市病)</p> <p>20(水) 情報システム管理委員会
歯科衛生士専門学校学校説明会
機器等安全自主点検日</p> <p>21(木) 第44回歯科医学教育セミナー
千葉校舎課長会
医療安全管理委員会(市病)
部長会(市病)
管理診療委員会(市病)
科長会(水病)</p> <p>22(金) 大学院夏期ベシクセミナー (25・
26日)</p> <p>26(火) データ管理者会議
カルテ整備委員会
診療記録管理委員会</p> <p>27(水) 第213回大学院セミナー
平成18年度看護師採用説明会(市病)
病院連絡協議会(水病)
院内情報システム検討委員会(水病)</p> <p>28(木) 医療安全管理委員会
第214回大学院セミナー
保険診療検討委員会(市病)</p> |
|--|---|

東京歯科大学広報 編集委員

松久保 隆(委員長)

浦田知明 江波戸達也 王子田 啓 大塚 健 小倉 等 河田英司 木崎佳奈 北林伸康 柴家嘉明
嶋村一郎 新谷益朗 杉原直樹 世木田 晋 高木直人 田口達夫 長谷川雄教 山岸 等(平成17年7月現在)

編集後記

新しい編集委員会で発行した広報が今号で1年を迎えました。はじめに金子学長より学長就任“一年を振り返って”を寄稿していただきました。学長は東京歯科大学の歴史に基盤を置いた本学の社会的使命を背景としてその達成のための目標設定、方策そしてその成果を具体的に明確に提示されています。また、今号ではその事業の内容として組織改変で新しく誕生した組織や新しい病院機能の内容を紹介しました。そして明るい話題である“特色GP”と“現代GP”の採択記事を掲載いたしました。211号の編集後記で干支歳時記から“今年は、その幹が力強く生長に邁進しているが、枝葉は付いていけない。言い替えば、世流を支配している既存の仕組みが効かなくなるほど、底流が突き進んでいる光景になる。”を引用しました。金子学長の教職員へのメッセージに対して“枝葉”も力強く、美しく可憐な花を咲かせ、成果をだせるように努力しなければなりません。

6月から8月にかけて基礎棟から厚生棟を通ると真っ赤な綺麗な花が咲いています。これから夏が来ることを実感できます。これは沖縄の県花のデイコの近縁種で耐寒性があるブラジル原産のアメリカデイコ(マメ科(ソラマメ亜科))でその名の由来は中国名の梯姑の音読みです。

(大学広報部長: 松久保 隆)

